

ミュージアム多摩

No. 32

～特集 ホームページ元年～

The screenshot shows the homepage of the Tokyo Saitama Museum Association. At the top, it says '東京 多摩の博物館・資料館ポータルサイト' and '多摩の博物館に行こう!' with a search bar. The navigation menu includes 'HOME', '多摩の博物館マップ', '展示・イベント情報', '館のイチオシ', and 'リンク'. The main content area is divided into 'Museum' (加盟館リスト) and 'Pick Up' (展示・イベント情報). Under 'Museum', there is a featured entry for '清瀬市郷土博物館' with a photo and address. Under 'Pick Up', there is an exhibition '企画展「清瀬周辺の昆虫たちー横山昆虫標本コレクションー」' with dates and location. A 'TOPIX' section lists various museum activities and exhibitions from February 2011. A '協議会からのお知らせ' section provides news about the homepage launch. On the right side, there are several logos for member museums and organizations, including '清瀬市役所', '国立市', '多摩市', '東京都奥多摩町', '瑞穂町', '青梅市', and '羽村市'. The footer contains copyright information for 2011 and a note about the site's funding.

東京都三多摩公立博物館協議会HPトップページ

2011.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目 次

特集 「ホームページ元年」

東京都三多摩公立博物館協議会の公式ホームページについて	1
東京都三多摩公立博物館協議会ホームページの今後の方向性について	2
府中市郷土の森博物館のホームページ事情	3
パルテノン多摩インターネット最新情報	4
福生市郷土資料室 ホームページの現在と課題	6
ホームページで発信してきたもの—たましん地域文化財団の場合—	6

平成 22 年度事業報告

平成 22 年度東京都三多摩公立博物館協議会事業報告	8
平成 22 年度企画委員会の活動について	10
平成 22 年度企画委員会第 1 回研修会報告	10
平成 22 年度企画委員会第 2 回研修会報告	11
平成 22 年度企画委員会第 3 回研修会報告	13

会員館活動報告

東村山ふるさと歴史館のホームページと平成 22 年度事業	東村山ふるさと歴史館	19
八王子市こども科学館のホームページと平成 22 年度事業	八王子市こども科学館	20
特別展【お稲荷さんの世界】の開催	府中市郷土の森博物館	21
2010 年度の町田市立博物館の活動について	町田市立博物館	22
「皇国地誌・西多摩郡村誌」の復刻にあたって	青梅市郷土博物館	23
平成 22 年度の活動報告	調布市郷土博物館	24
平成 22 年度の活動報告	瑞穂町郷土資料館	25
おかげさまで入館者 300 万人達成	奥多摩緑と水のふれあい館	26
平成 22 年度活動報告～今後に向けて～	武蔵村山市立歴史民俗資料館	27
あきる野市五日市郷土館設立 30 年を迎えて～最近の活動報告～	あきる野市五日市郷土館	28
来館者は満足しているか～プロダクト的発想からマーケットイン的企画への転換の実例～	羽村市郷土博物館	29
平成 22 年度主要事業報告	清瀬市郷土博物館	30
企画展「甲武鉄道と立川」の開催	立川市歴史民俗資料館	31
檜原郷土資料館の概要と最近の活動報告	檜原村郷土資料館	31
郷土資料館としての歩みを踏まえ、新たな段階へ	日野市郷土資料館	32
企画展「浴恩館をめぐる人々」	小金井市文化財センター	32
企画展「昆虫細密画にみるミクロの世界」～中西章の原画から～	くにたち郷土文化館	33
ネット社会と博物館事業の一考察	東大和市立郷土博物館	34
市民が調べる多摩の民俗	パルテノン多摩歴史ミュージアム	35
平成 22 年度 新規事業「紅葉とたてもののライトアップ」の実施について	江戸東京たてもの園	36
もっと身近に、縄文そして弥生	東京都埋蔵文化財センター	37
平成 22 年度活動報告	集合住宅歴史館	38
平成 22 年度の取組み～参加・体験型科学館として～	多摩六都科学館	39
国立ハンセン病資料館最近の活動～企画展を中心として～	国立ハンセン病資料館	39

☆ 特集「ホームページ元年」

東京都三多摩公立博物館協議会の公式ホームページについて

東京都三多摩公立博物館協議会企画委員会ホームページ班

平成23年2月に公開となった東京都三多摩公立博物館協議会（以下、「三博協」）の公式ホームページは、三博協の情報発信に関する活動の集大成と言うべきものであることから、本稿では、その経過や制作のコンセプトなどをひとつの記録としてお伝えしたいと思います。

1. これまでの経過

三博協では、外部へ向けた情報発信事業として、平成13年度の「多摩の博物館さんぽ」創刊以降、スタンプラリーの開催、平成17年度の「博物館さんぽ スタンプラリー特別版」の発行などを行ってきました。さらに、平成18年度にガイドブックの発刊を、翌19年度はガイドマップの発行をそれぞれ検討しましたが、いずれも財源の問題や、印刷物の情報更新の難しさの面などが指摘され、実現には至りませんでした。

そうした中、柔軟な情報発信媒体として、ホームページ（以下「HP」）の活用に関心が集まります。これまでも加盟館のHPに間借りする形で、ごく簡単な情報は発信していましたが、改めて独自のサイトとしての可能性を探ることになりました。

企画委員会における検討の結果、HPは有効であるとの結論に達し、平成20年度に全加盟館に対してアンケートを実施、概ねご賛同を得ることができたことから、平成21年度の総会においてHP制作を議案提出し、可決されました。これを受けて、企画委員会内部にHP班が設置され、翌22年度中の開設に向けた作業がはじまります。

まず、三博協の自己財源で可能な規模・レベルでのHP制作が検討されましたが、立上げにも更新にも作業負担が生じるなど、専任事務局のない組織としては難しい面があることが明らかになってきました。

こうした中、東京都市長会の助成制度※について、幸いにもその活用が見えてきたことから、HP班においてこれを前提とした企画案を作成し、三博協役員会及び協議会（全体会）の承認を得ます。その上で、東京都市長会へ申請を行い、審査を経て平成22年度助成事業として採択されるに至りました。

平成22年度は、総会において事業規模及び推進体制の承認を得た後、コンセプトや構成案について検討を進め、役員会の了承を経て競争入札により委託先を決定、実際の製作作業に入りました。

※「多摩・島しょ広域連携活動助成制度」平成22年度より東京都市町村自治調査会扱い

2. コンセプト

(1) 構成のコンセプト

既に各館のHPが充実していますから、内容の重複では意味がありません。

そこでHP班では、まず、各地の類似団体のHPを集め、コンセプトを大きく3つに分類しました。ポータル（玄関口）的な性格を強く出しているHP、ポータル的な面よりも独自の情報発信で閲覧者に訴求しているHP、そして両者の中間的なHPです。

現在、インターネット上には、全国の博物館施設を網羅した検索サイトが存在し、内容・機能・デザインとも優れたものが見られます。したがって、三博協のようにエリアが限られる場合は、ポータル的なだけでは閲覧者の獲得の面で不利だと考えられます。

検討の結果、一般の方に、無数のHPの中から「三博協HP」を見つけて来館者となっていただくには、他のサイトとの差別化や独自の話題性が必要であると判断し、ポータル的でありつつも独自の情報を発信していくタイプのHPが望ましい、という結論に達しました。

当面は、各館のイベントなどタイムリーな情報と、特徴的な収蔵品など館の魅力を伝える内容で構成し、今後は、三多摩地域ならではの古文書・古地図などの資料をデジタル化して公開するなど、付加価値付けも検討することとしました。

(2) 主な対象者

来館者の増加を図るには、エリア外への情報発信も必要です。インターネットに地域の制限はありませんが、各館の規模と地域性の強さから考えて、情報発信の対象は関東エリア程度が適当だと思われます。したがって、マップなどについてもこのエリアの人びとに分かる内容での作成を基準としました。

年齢層については、例えば子どもを対象とするかどうかでデザインや内容が大きく異なることから、HPという媒体の普及度合い、「来館」というアクションの主体になれるかどうか、さらに入館者の統計や「たま検定」受験者の傾向などを参考に、30歳台と50歳～60歳台をメインターゲットとして設定し、ファミリー層に向けたキッズページ等については今後の拡充の中で検討することとしました。

(3) 基本デザイン

全体のデザインについては色彩学を踏まえ、多摩のイメージをベースに、文化的な、アカデミックな雰囲気を

意識したやや落ち着いたものとなりました。対象とした年齢層では、散策やショッピングなど、レクリエーション的な活動の一環として来館するケースも多いと考えられ、事前にタウン情報やイベント情報などのサイトを閲覧してくることを想定して、これらのHPの中にあつての差別化も考慮しています。

(4)更新システム

更新については、コストを最低限に抑えつつ、各館の人手を煩わせないようにする必要があります。

各館の情報セキュリティによるソフトのインストール制限や、担当する方のスキルの面から、市販のHP作成ソフトによる更新はできないと判断し、更新入力に必要なシステムをつくり込みました。これにより、ごく簡単な作業で更新ができるようになり、各館・事務局の人的負担の軽減を図っています。

(5)その他の機能

技術的な面としては、検索エンジンへの対応システムなども盛り込みつつ、後々の拡張性も考慮し、出来るだけシンプルなものとなるようにしています。

3まとめ

本稿では、HPからは直接読み取れない経過やコンセプトなどについてのみ触れましたので、具体的な構成や機能は、実際のHPでご覧いただければ幸いです。

三博協の公式HPという新たな発信媒体については、各加盟館がそこに積極的な意味を見出したからこそ生まれたものであると思います。このHPが大きき育つよう、今後の各館のご活用をお願いいたします。

三博協 URL <http://tamahaku.jp/>

(文責 羽村市郷土博物館 河村康博)

東京都三多摩公立博物館協議会ホームページの今後の方向性について

企画委員会ホームページ班委員・会長館学芸員 柳澤 剛 (清瀬市郷土博物館)

1 はじめに

東京都三多摩公立博物館協議会（以下、三博協と略す）では、今年度財団法人東京市町村自治調査会から多摩・島しょ広域連携活動助成金を受けてホームページ（以下、HPと略す）を立ち上げました。これまでは、三博協創設時からの会員館の一つでもあります八王子市郷土資料館のご協力で、八王子市の公式HP内に「東京都三多摩公立博物館協議会加盟館一覧」という形で存在するというものでした。これまでの経緯等につきましては、別稿に詳細がありますのでそちらをご参照いただくとして、本稿では立ち上がった三博協HPの今後について記したいと思います。三博協HPの今後の方向性という大それたタイトルを冠してしまいましたが、三博協としては未知なる領域への展開ということもありますので、希望的な表記及び内容になっている部分が幾分かはありますことをご容赦いただき稿を進めます。

2 体制など

今年度のHP立ち上げに際しまして、昨年度に引き続いて企画委員会にHP班を設置して進めてまいりました。このことは別稿のとおりですが、今後も名称はともかくとしまして、企画委員会の一つの班として三博協HPの拡張を含めた運営等を行う班を作り、そこを実働部隊として進めていくことになるかと思えます。

今年度のメンバーは、河村康博氏（羽村市郷土博物館）、松本美虹氏（羽村市郷土博物館）、橋場万里子氏（パルテノン多摩歴史ミュージアム）、川島直之氏（青梅市郷土博物館）、安齋順子氏（くにたち郷土文化館、平成22年10月～）、柳澤剛（清瀬市郷土博物館）の6人で、企画委員



HPIについての協議風景（役員会にて）

長の佐藤智敬氏（府中市郷土の森博物館）及び会長館（清瀬市郷土博物館）の館長及び門田事業係長らと連絡・連携を取りながら進めてきたものです。今後の事業展開を考える上で、人数的には決して多くはありません。三博協の規模を考えますと止むを得ないかともいえませんが、今後も同程度以上の人数で進めていくことになるでしょう。会員館におかれましては、より多くの人材を企画委員へ推薦していただきたく、お願いいたします。

3 内容充実へ向けて

今年度は三博協HPとしてある意味最低限必要と思われる機能を盛り込んでの立ち上げになりました。ですので、これから様々な内容充実を行うことにより、より多くの方々に閲覧してもらえるような、また、リピーターが増えるようなHPを目指していく必要があります。そのためには「動き」のあるHPにすべきで、内容の更新頻度が低いようではいけません。会員各館になるべく新しい

情報を入力していただき、古い情報ばかりが掲載されている HP とならないようにしなければいけないと考えます。会員館におかれましてはご協力をお願いいたします。

次年度以降の内容充実課題としまして、多摩地域の地域情報を発信する HP としての位置づけを明確にしていき、三博協 HP の存在意義を高めていきたいと考えています。その計画として、次年度に各館が所有・所蔵する絵図や地図、そして写真等の資料をデジタルデータ化して HP にアップする方向で進めております。財源としましては、財団法人東京市町村自治調査会の多摩・島しょ広域連携活動助成金に申請する方向で調整中です。この計画が実現する事により、多摩地域の住民には地域のことを比較的容易に理解するための手助けになると共に、多摩地域を研究する研究者にとっても有意義な HP になることが期待されます。会員各館へ足を運ぶきっかけを提供することに繋がるでしょう。また、こども対応のページについても、今後検討していく予定です。

種々、具体的な内容・作業につきましては、次年度の企画委員会等に委ねることになりますが、各館の負担がそれほど大きくならないような方向で進めていきたいと考える次第です。

4 おわりに

今年度、三博協会館の一職員として企画委員会に関わり、HP の立ち上げに取り組んできました。これまで企画委員になったことがなかったため、HP 立ち上げにして

も過去の経緯があまり分からない状況でのスタートでした。また、当館は多くの自治体直営の会員館がそうであるように、館独自の HP を持たず、自治体の HP 内に館のページがあるという形態をとっています。ですので、HP のシステムを含む構築ということには取り組んだことがありませんでした。そのような、右も左も分からないままのスタートで、企画委員の先輩方、HP 班の先輩方から教わりながら共に HP を立ち上げました。次年度以降の計画につきましては、HP 班で検討する事は当然ですが、三博協の協議会で意見を募ったり役員会で検討したりと会長館としての業務にも携わりながら進めてきました。実際に HP 立ち上げに関わってみますと、予想以上の難しさがあり、“生みの苦しみ”を味わいました。また、HP の内容充実を図るにあたって、ご担当の方は種々の苦勞が生じてくるかと思いますが、達成感はあることでしょう。

少し長くなってしまった苦勞話(?)もここまでとして、本稿に記した今後の方向性を実現させるためには会員各館の協力なくしては成し得ませんので、これからも可能な限りご協力をお願いいたします。

まだ産声を上げたばかりですが、今後内容充実を経ていくこととなります三博協 HP が、多摩地域の住民を中心とした多くの方々に活用される HP として育っていただきますことを願っておわりの言葉とします。

府中市郷土の森博物館のホームページ事情

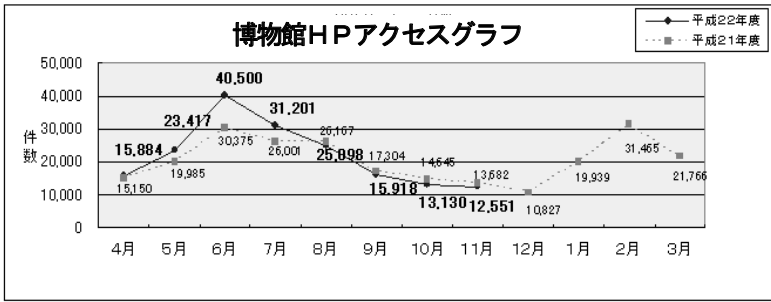
府中市郷土の森博物館 中村 武史

今こそインターネットを利用したホームページは、博物館に限らず多方面で発展し、もはや会社・店舗・学校・病院等々、開設されていないものは皆無に近い状況である。時代のテクノロジーは加速度を増し、使い手の私たちが置いてきぼりを食いかねない程、情報発信量と伝達速度はめまぐるしい。昔なら新聞・雑誌などの広告媒体を注意して探すか、直接相手先に問合せの電話をかけて聞くなどの方法しかなかったものが、指先一本で瞬時に達成されてしまうのだ。昭和を生きてきたアナログ世代には、魔法のごとく便利な手段である。が、ゆえに、発信する側が背負うリスクも少なくない。

発信者は、正確な情報を適切なタイミングでホームページ上に公開することが大原則となる。少しでも間違えれば、あっという間にその誤情報が出回ってしまう。数時間後に正したとしても、その間のアクセス件数を抹消することはできない。ホームページは厳密に言うと、原稿のミスが許されない代物である。当館の場合は、博物館単独でホームページを開設しているわけではなく、財団法人府中文化振興財団が統括し、所属の郷土の森博物

The screenshot shows the homepage of the Fuchū City Rinsen no Mori Museum. At the top, there is a navigation bar with links to '府中文化Net 検索' and '府中市郷土の森博物館'. Below this is a large banner image of the museum building. To the right of the banner is a search bar and a '検索' button. Below the banner, there are several content blocks: '催物情報' (Exhibition Information) with a schedule calendar, '施設紹介' (Facility Introduction), 'お問い合わせ/アンケート' (Contact Us/Questionnaire), '博物館リニューアル情報' (Museum Renovation Information), and '旧三回家長屋門の屋根修理工事について' (About the Roof Repair Work of the Old Sankei Family Gate). There are also sections for 'イチャオシ情報' (Information) and 'Information' with contact details and a calendar. The bottom of the page has a 'ホームページ表紙写真' (Homepage Cover Photo) section.

ホームページ表紙写真



館・芸術劇場・グリーンプラザ・ルミエール府中と、それぞれの施設の情報を発信している。よって、情報更新のオペレーターは、財団の総務部門に置かれた、広報営業担当が行っている。それぞれの所属施設から日毎・月毎、あるいは突発的にリリースされる原稿を元に、まとめて更新作業が順次進められていく。当館の場合は、基本2か月毎に発行している事業案内誌「かれんだー」を元に定期的な更新を行うが、事業数が多いこと、野外部分を持つ博物館であるがゆえ、季節の花情報等が日常的に変わることによって頻りに情報のリリースが生じる。従って、当館が直接ホームページへの掲載を手掛けていない分、仲介人への迅速な原稿渡しが要求される。スピーディーな行動、かつ仲介者が理解しやすい宣伝材料の伝達は、結構気を使う作業でもある。

当館のトップページアクセス数は昨年度では、財団全体の所属施設合計ヒット数の内 35.7%で首位、今年度も11月までは、財団全体の 43.8%を占め先頭を走る。財団が抱える府中の文化施設の中で、当館への情報収集ニーズの高さを示す目安を表していると思う。オペレーターとの連携により、何とか更新対応が取れている現状も、ヒット件数に影響している一端でもあろう。

一方当館では、専任の広報担当職員を置いていない。広報の窓口担当者を通じて、情報発信や取材対応を何とかこなしている苦しさがある。発信項目の多い当館では、順次情報を載せる、削除する、の繰り返しは、忙しさにかまけてオペレーターへの伝達をつい忘れがちにもなる。オペレーターの判断で、旧情報の削除や誤情報の訂正が

なされることもあるが、逆にこちらの意図とは違った形で掲載されることもある。迅速を心がけても仲介者を通すことで、発信より掲載まで若干の時間が費やされることも否めない。現状手段で回している以上、あくまで情報伝達が中心の実情なのである。

ホームページの主旨が、単に事業の告知であれば、現状に大きな問題は無い。しかし、

当館は博物館である。半永久的に価値の崩れない情報を有するのが博物館と言う考え方から、収蔵資料の紹介を筆頭に、追加の場合を除いては、ほぼ更新することのない(期間限定ではない)情報を公開する一面がある。博物館としては、本来こちらに重きを置くイメージだが、実際にトップページを飾るのは、当り前で新着事業中心となる。これはいいとして、今後、インターネットの特性を利用した方向性を見出し、発展的にホームページを考える時、博物館としては収蔵資料の公開・検索システムのアップは理想である。現状では館内にて導入されているものの、費用面からホームページへの組み込みにまで至っていない。即時には叶わないまでも、実現の方向で検討していく重要項目と捉えている。加えて、事業参加の申込み等でも、ユーザー側から簡単に入力可能なシステムを展開できれば尚更充実度は増す。また、三博協加盟館同士でリンクを張る等の連携策を打ち出していくことも、当館だけの課題ではないだろう。

当館ホームページは、財団が開設する中の1セクションという位置付けである。博物館だけが一人歩きし難い面も持つ中、仲介者である広報営業担当と連携を取りながら、“できる所から変えていく” 試行錯誤が日常の課題となる。展示会や資料紹介に特色を出しつつ、見やすい探しやすい画面を模索することが、現体制で改善可能な作業であろう。そのためには、他館ホームページのリサーチを含めて担当者の知識がまだまだ足りない。自己研さんと共に、課題と向き合う意識を持つことこそが根本の打開策となる。

パルテノン多摩インターネット最新事情

公益財団法人多摩市文化振興財団 仙仁 径

ホームページについて

ここ10年ほどで、インターネット利用が一般化し、この記事をお読みの方の多くも仕事やプライベートで様々な情報を得たり、あるいは発信したりしているのではないのでしょうか。パルテノン多摩歴史ミュージアム(以下当館)にもホームページがありますが、複合文化施設の中の1施設という事で、パルテノン多摩のホームページの中に当館に関するページがあります。パルテノン多摩のホームページは2008年のリニューアルで、機能等の

「骨組み」を業者に構築してもらい、催事情報などの「肉付け」はパルテノン多摩の方でできるような仕様に変更されました。それにより現場の人間が発信したい情報をより迅速かつ大量に発信できる仕様になりました。

パルテノン多摩トップページ (<http://parthenon.or.jp/>) には、当館の詳細を紹介するページへの入口のほか、キッズファクトリー、当館ツイッター、デジタルミュージアム、刊行物(展示図録など)・グッズ紹介、博物館ボランティア紹介と博物館の各事業への入口があります。ま

た最新情報のコーナーでは、簡単に興味のある最新情報へアクセスする事ができます。これらの情報更新は、職場のホームページ担当者に依頼することで更新されます。

さて、ホームページは市民にどの程度利用されているのでしょうか。博物館の講座などではアンケートを実施していますが、どこで事業を知ったかを問う項目でホームページと回答した方は、残念ながら少数にとどまり、紙媒体が主流となっています。これは、博物館事業の参加者が比較的インターネット利用の少ない中高年に偏っている事が理由と思われる。一方、子ども向けの講座申し込みでインターネットと往復はがきによる申し込みを併用した場合、ほとんどの方がインターネットで申し込みられます。これは、子どもの親がインターネットを普段から利用している世代であるからと考えられます。このように、現状では最も博物館を利用している年齢層の方のホームページ利用は少ないようですが、今後は中高年のインターネット利用者が増加する可能性があり、ホームページでの情報発信がますます重要になってくるのではないのでしょうか。

ツイッターの活用

さて、上記のように当館の主な利用者は、中高年の方と小学生となっており、その中間の年齢層へ情報を発信し、利用していただく事は課題の一つと考えています。利用については多忙な年齢層であるなど、難しい問題がありますが、発信については最近、強力な道具が登場しました。それがツイッターです。

ツイッターを利用された事がない方でも、どこかでツイッターという言葉聞いた事があるのではないのでしょうか。ツイッターを利用するにはまず利用者 ID を取得し、その ID から発信したい情報(つぶやき)を 140 字以内にまとめ、全国(英語なら全世界)に向けて発信する(つぶやく)、ただそれだけです。つぶやいた情報は、主に自分の ID とつながりのある利用者(フォロワー)が読むほか、グーグルなどの検索でも表示され、ID を持っていない人でも読む事が可能です。また、ツイッターには「リツイート」という、自分が気になった情報を多くの人に知らせる機能があります。このツイッターの利用者は、M2 層と呼ばれる 30 代後半～40 代前半の男性が最も多いというデータがあり、その年代の方に情報を届ける道具として有効だと考えられます。

ツイッターはすでに 2009 年頃から流行していましたが、ようやく当館でも昨年より博物館部門に限り、試験運用と言う形で 2010 年 6 月 29 日よりつぶやき始めました。通常 1 ID は 1 人でつぶやかれますが、当館では 1 ID を共用し、複数人でつぶやいています。つぶやく内容は、当館の催事情報が最も多く、時々学芸員の活動の一端についても触れています。また、必要に応じてつぶやきの中にホームページの URL を入れる事で、ホームページへ



ホームページ表紙写真

の誘導と、より多くの情報を提供する事が可能になります。その一方、情報の正確さは十分留意しなければなりません。つぶやきは削除可能ですが、一度拡散すると回収不可能になる恐れがあるからです。また、つぶやきを鵜呑みにする事も危険でしょう。当館 ID のフォロワーは現在も増加中で、現時点(1月15日)で 302 となっています。他の博物館のほか、博物館に関心のある一般の方や、近隣の民間事業者などからもフォロワーされています。中には当館のつぶやきを頻繁にリツイートして下さる方もおり、試験運用中とは言えすっかり情報発信ツールとして定着した感があります。一方、当館がフォローしている ID は 232 あります。博物館はなるべくフォローしていますが、ツイッターを活用している館はまだまだ少ないようです。

さて、当館がツイッターを利用して感じたメリットについて書きたいと思います。一つは情報発信によるメリットで、それにより①当館の存在を広く知らしめられる、②容易に事業を PR することができる事が挙げられるでしょう。また、フォロワーとの交流によるメリットとして、③同じ博物館関係者や、業種を超えた方との交流が容易にできる、④地域の情報が入り易くなる、⑤当館への親しみを感じてもらえる、といった事が挙げられるかと思えます。その一方、情報を受け取った人が実際の行動に移るかどうかは未知数です。中には実際に当館まで来館された方のつぶやきもあるので、まったく効果がないわけではないようですが、アンケート回答で、ツイッターが情報源だった方は少なく、今後、どのようにツイッターを活用していくか考える必要があるでしょう。

数年前まで、こまめに情報発信する道具として「ブログ」がもてはやされましたが、現在ではより簡便なツイッターにその地位を奪われた感があります。このように、デジタルの世界は変化が速く、ツイッターもいずれ新し

い何かに地位を追われるかも知れません。重要なのは、情報を多くの人に届けたい！という気持ちであり、現時

点で多々ある手段の中からふさわしい手段を選択する事ではないでしょうか。

福生市郷土資料室 ホームページの現在と課題

福生市郷土資料室 菱山 栄三郎

平成 18 年 12 月に福生市郷土資料室のホームページが開設されました。この開設に関わる詳細はミュージアム多摩 28 号にて紹介しました。そこで今回は開設後の運用と今後の課題や展望について検証したいと思います。

当資料室のホームページの特徴は、28 号でも述べましたが、収蔵資料を検索できる「収蔵資料検索システム」があることです。現在までに電算化した収蔵資料は約 2 万件ですが、その約 4 分の 1 が検索システムにより、ホームページ上で閲覧できます。これらの資料は一部の資料を除き、所定の手続きを申請すれば、閲覧や貸し出しが可能です。開設以来 4 年ほど経過しました。多くの研究者の方々や出版社、また博物館などから資料の貸出や情報提供についての依頼、問い合わせをいただきました。また展示会や講演会などには他県からの参加者も見られ、ホームページを通じて、福生市や福生市郷土資料室の宣伝効果が十分に表れていると感じております。

しかしながら 4 年も経つといろいろな課題も見えてきました。歴史・郷土史の初級者の方々や子どもには難しい内容になっていること。更新時期が安定しないこと。新しい情報の提供が少なくなっていることなどが考えられます。ほかにも多くの課題がありますが、今後はこれらの点をクリアし、より親しみやすいホームページを目指します。

23 年度はリース契約である「収蔵管理システム」の契約終了年にあたり、当然並立するホームページもリニュ

福生市郷土資料室:福生の歴史や民俗・自然に関する資料を収集・整理し、保存活用しています。



ホームページ表紙写真

ールとなる予定です。より親しみやすく、わかりやすい福生市の紹介ページや、福生にまつわる用語集、人物紹介や言い伝え、これらにまつわる参考文献の紹介などの情報提供が増やしていこうと考えています。

ただし、詳細な情報の提供にこだわるあまり使い勝手の悪い構成になったり、館内展示との区別が不明確になってしまったりしないよう、この点については注意を払うつもりです。

福生市郷土資料室のホームページアドレスは以下のとおりです。ぜひご覧ください。

<http://www.museum.fussa.tokyo.jp>

ホームページで発信してきたもの—たましん地域文化財団の場合—

たましん地域文化財団 保坂一房

ホームページの開設

たましん地域文化財団がホームページ（HP）を開設したのは 2001 年 5 月 15 日ですから、ちょうど 10 年前になります。HP には全体で 9 つの項目を設けました。美術部門では、たましん歴史・美術館（国立市）、御岳美術館（青梅市）、たましんギャラリー（立川市）3 館の展示情報を掲載しています。歴史部門では、『多摩のあゆみ』、歴史資料室、刊行物の内容をご案内しています。また、財団プロフィール、講座・講演、リンク集を設けて、全体で 9 つになります。

開設以来 10 年間、この構成に変更はありません。ここでは、歴史部門の項目内容をどのように充実させてきたのかを振り返ってみたいと思います。

『多摩のあゆみ』の総目次

HP を開設して、まず『多摩のあゆみ』の総目次を載せようと思いました。本誌では第 81 号（創刊号～第 80 号）、第 101 号（第 81 号～第 100 号）、第 120 号（第 101 号～第 120 号）に、総目次を掲載しています。また、本誌とは別に 3 回ほど総目次を発行しました。

目次は毎号追加していきますので、冊子目録ではある程度追加された時点で新しく作成する必要があります。かなりのコストもかかります。この点、HPは最新号を発行したらデータを更新すればよいので、冊子より手軽でコストもかかりません。

HPを開設してすぐに、創刊号から最新号までの論題と著者名の総目次を載せました。あわせて、「入手資料のごあんない」欄の書誌情報も、「新着図書・雑誌」として掲載しました。

歴史資料室所蔵資料の検索システム

歴史資料室所蔵資料の検索システムに関しては、2003年4月頃から準備をはじめ、翌04年7月ようやく公開しました。現在、「図書」「雑誌」（「図書と雑誌」という検索項目も設けました）「地図」「絵葉書」「チラシ」の5種類、3万点以上の資料群が検索できます。

検索システムで大切なことは、さまざまな利用者を想定して、予備知識がなくても直感的に検索できるようにすることでしょう。当時、まず取り組んだのは、新旧の漢字、アラビア数字と漢数字、アルファベットや記号などの差異に着目して、どちらを入力しても検索できるようにすることでした。人名や古い書名などは、旧漢字で表記されている場合があります。厳密に言えば旧漢字が正しいのですが、検索項目欄に新漢字を入力しても、旧漢字の同義語とみなして検索するようにしました。ダッシュに関して一、-、一、一は、本来違うものです。しかし、利用者が検索で区別するのは困難です。漢字の異体字や、さらにすすめて書名のシリーズ名が途中で変わった場合なども検索できるようにしました。

次に、資料群によってそれぞれ検索項目を変えて検索できるようにしました。地図の場合は、縮尺から検索することができます。例えば1/25,000、1/50,000の地図を探すと、という検索ができます。絵葉書とチラシはタイトルだけでは検索しづらいので、どこの地域のものか、地域名でも検索するよう工夫しました。また、絵葉書の古いものは、画像情報をUPしています。絵葉書の場合、画像を見ることによって内容を窺い知ることができます。2010年からはチラシに関して、画像情報を追加してUPしました。

近年、力を入れて整理しているのが、雑誌の論題情報です。利用者にとって、論題情報はとても重要です。けれども膨大なデータ入力をとまなうので、開設当時はできませんでした。『武蔵野』『東京史談』『多摩郷土研究』など、多摩地域を対象にした歴史系雑誌から論題情報の入力をはじめ、2008年より「雑誌」あるいは「図書と

雑誌」で、論題名や著者名で検索できるようにしました。



ホームページ表紙写真

今後も論題情報載せる雑誌の数を増やしていく予定です。

『多摩のあゆみ』のPDF化

以上、述べてきたように、HPでは『多摩のあゆみ』の総目次と、歴史資料室の所蔵資料情報を発信しています。今までは活字媒体の『多摩のあゆみ』で情報発信してきましたが、電子媒体のHPも情報発信の大きな柱になってきました。最近ピンポイントで、『多摩のあゆみ』何号のこの論文がみたいとメールで問い合わせがきます。多分HPなどを見て、聞いてくるのではないかと思います。

このような状況になって、今まで以上に『多摩のあゆみ』のバックナンバーが重要になってきました。当然、古いものは欠号になっていきます。近年、各種学会や大学図書館などでも、HPから過去の学術誌などをPDFファイルでダウンロードできるようになってきました。『多摩のあゆみ』では、第100号から印刷発行時にPDFファイルを作製しています。創刊号～第99号に関しては、2006年に一括してPDFファイル化しました。

今後、著作権やサーバー環境などを整えて、バックナンバーの提供に関して検討していきたいと思っています。

伊与田コレクションの公開

当財団では、八王子ご出身の伊与田昌男氏(1914 - 1989)が撮影した写真を、1993年にご寄贈いただきました。戦前から戦後にかけて、多摩地域や都心部の風景や人びとが被写体になっている貴重な歴史写真群です。

約25,200点にのぼる伊与田コレクションは、フィルムの劣化が憂慮される戦前のもからデジタル化しています。これらに関して、いずれはHPなどで公開する方法を考えていきたいと思っています。

☆ 平成 22 年度事業報告

平成 22 年度東京都三多摩公立博物館協議会事業報告

会長館学芸員 柳澤 剛 (清瀬市郷土博物館)

平成 22 年度に東京都三多摩公立博物館協議会 (以下、三博協と表記) で実施した事業等を報告いたします。

平成 22 年度の事業を各担当別の時系列で表にしました (表 1～表 4)。例年行っている定期総会、協議会、役員会、3 回の研修会を行いました。今年度の大きな事業としては、三博協ホームページ (以下、HP と表記) の立ち上げがありました。以下に会長館が担当の業務 (以下、事務局と表記)、企画委員会の業務、機関誌編集委員会の業務を順番に記します。

1 事務局

定期総会を平成 22 年 5 月 13 日 (以下、本文中で月日だけの表記の場合は平成 22 年を示すこととする) に羽村市生涯学習センターゆとろぎで行い (表 1 No. 1)、今年度の会長及び役員並びに機関誌編集委員、企画委員が承認されました。また、HP の立ち上げ体制が承認されたのも今年度の総会でした。6 月 9 日に羽村市郷土博物館で会長館の事務引き継ぎを行い (表 1 No. 2)、今年度の体制として動き出しました。

第 1 回協議会は 9 月 3 日に清瀬市生涯学習センターにて行いました (表 1 No. 4)。八千代市立郷土博物館の佐藤誠氏に「地域力を活かす魅力ある博物館事業 ～学芸員は連携コーディネーター～」と題して講演をしていただきました。これは、後述の千葉県博物館協会との連携を行う一環として実施したものです。

役員会は 9 月 3 日に第 1 回目を行い (表 1 No. 3)、補正予算の報告と同日の第 1 回協議会の進行や HP に関して議論しました。10 月 22 日に第 2 回目 (表 1 No. 7) を行い、HP 制作請負業者を決定しました。平成 23 年 2 月 16 日に HP に関して等で第 3 回目 (表 1 No. 9) を、同 3 月 17 日に今年度の事業報告等で第 4 回目 (表 1 No. 10) を行い、同 5 月の第 5 回目は、会計監査、平成 23 年度定期総会の確認等を予定しています (表 1 No. 11)。

2 企画委員会

企画委員会は、委員長を筆頭に、研修会班、博物館さんぽ班、HP 班の 3 班に分かれ活動しました。

研修会班では、今年度も例年通り 3 回研修会を実施しました。第 1 回目は、9 月 28 日にパナソニック電工汐留ミュージアムにて「LED 照明を使った展示と照明のノウハウ ～パナソニック電工汐留ミュージアムにおける展示を事例として～」というタイトルで行い (表 2 No. 6)、第 2 回目は、11 月 10 日に立川市市民会館にて「地域資

料の収集・保存・活用 ～多摩の地域資料学を目指して～」というタイトルで行いました (表 2 No. 12)。これは、三多摩地域資料研究会との合同研修会で、平成 19 年度に続いて 2 回目となるものです。そして、第 3 回目は、平成 23 年 2 月 17 日に府中市郷土の森博物館にて「博物館が地域にできること ～子ども達のために～」というテーマで千葉県博物館協会との合同で行いました (表 2 No. 19)。研修会の報告につきましては、本号に別稿がありますので、詳細はそちらをご参照ください。

三博協として大きな事業であった HP の立ち上げは、HP 班において検討・実施しました。財団法人東京市町村自治調査会から多摩・島しょ広域連携活動助成金を受けての HP 立ち上げ事業に際しましては、三博協としては恐らく初めて補正予算を組んでの取り組みとなりました。9 月 3 日の第 1 回協議会で最終的に補正予算が承認され、それを受けての業者選定、業者発注となりました。HP 班では HP 制作会議を 5 回行い、業者と内容を詰めながら制作にあたりました (表 2 No. 10・No. 13～15・No. 17)。HP に関しての詳細は、本号の特集をご覧ください。

博物館さんぽ班は、会員各館の催し物情報をまとめた「多摩の博物館さんぽ」を 10 月と平成 23 年 3 月の 2 回発行しました (表 2 No. 7・No. 20)。

また、今年度は例年行っている事業とは別に基本的に企画委員会に付託した案件がもう一つあります。それは、千葉県博物館協会からの打診により相互の交流を図ることです。同協会の調査研究委員会担当の理事館 (八千代市立郷土博物館) より打診があり、三博協と交流を持ちたいと呼び掛けられたものでした。8 月 19 日に双方委員の顔合わせを行い (表 2 No. 4)、単年度の交流ではなく今後も交流していくことを合意しました。平成 22 年内に双方がアンケートを各会員に取った上で、年度末にその結果を基にして選択した事例を発表する合同の研修会を、平成 23 年 2 月 17 日に府中市郷土の森博物館で開催しました (平成 22 年度第 3 回研修会として実施、表 2 No. 19)。

3 機関誌編集委員会

機関誌編集委員会は、10 月 15 日に第 1 回目の会議を開き委員長を決定しました (表 3 No. 1)。続く 11 月 5 日の第 2 回目の会議で特集テーマや編集方針が決まりました (表 3 No. 2)。平成 23 年 2 月 4 日の第 3 回目の会議で各館や各執筆者から提出された原稿を基に編集を行い (表 3 No. 3)、同 3 月 11 日の第 4 回目の会議で、校正等

を行い(表3 No.4)、同3月31日に発行しました(表3 No.5)。

最後に、8月3日にHPを制作するにあたり受けた助成金の、次年度の助成説明会に参加しました(表4 No.1)。11月17日には次年度の助成金申請にあたっての事前ヒアリングを受けてきました(表4 No.3)。

また、会員館であるくにたち郷土文化館からの依頼により、同館学芸員が笹川科学研究助成を受けて実施する「地域博物館における市民グループ活動に関する調査」について、8月27日に会員各館への協力依頼を行いました(表4 No.2)。

以上が、平成22年度の事業報告になります。

表1 事務局

No.	日付	名称	場所
1	H22/ 5/13	定期総会	羽村市生涯学習センターゆとろぎ
2	6/9	会長館事務引き継ぎ	羽村市郷土博物館
3	9/3	第1回役員会	清瀬市生涯学習センター
4	9/3	第1回協議会	清瀬市生涯学習センター
5	10/6	HP制作業者選定会議	清瀬市郷土博物館
6	10/8	機関誌編集委員会事務引き継ぎ	清瀬市郷土博物館
7	10/22	第2回役員会	清瀬市郷土博物館
8	12/24	HP制作事務打ち合わせ	清瀬市郷土博物館
9	H23/ 2/16	第3回役員会	清瀬市郷土博物館
10	3/17	第4回役員会 (大震災で未開催)	清瀬市生涯学習センター
11	5月を 予定	第5回役員会	未定

表2 企画委員会

No.	日付	名称	場所
1	H22/ 6/16	第1回企画委員会	清瀬市郷土博物館
2	7/15	第2回研修会第1回準備会議	立川市中央図書館
3	7/16	HP班会議	清瀬市郷土博物館
4	8/19	第1回千葉県博物館協会調査研究委員会・三博協企画委員会合同打合せ	清瀬市郷土博物館
5	9/28	第2回企画委員会	パナソニック電工

No.	日付	名称	場所
			汐留ミュージアム
6	9/28	第1回研修会	パナソニック電工 汐留ミュージアム
7	10/15	「多摩の博物館さんぽ」2010年度 秋・冬号発行	—
8	10/22	HP制作業者顔合わせ	清瀬市郷土博物館
9	10/27	第2回研修会第2回準備会議	立川市中央図書館
10	11/4	第1回HP制作会議	清瀬市郷土博物館
11	11/10	第3回企画委員会	立川市市民会館
12	11/10	第2回研修会	立川市市民会館
13	11/12	第2回HP制作会議	清瀬市郷土博物館
14	12/3	第3回HP制作会議	清瀬市郷土博物館
15	H23/ 1/14	第4回HP制作会議	清瀬市郷土博物館
16	1/28	第2回千葉県博物館協会調査研究委員会・三博協企画委員会合同打ち合わせ	くにたち郷土文化館
17	2/16	第5回HP制作会議	清瀬市郷土博物館
18	2/17	第4回企画委員会	府中市郷土の森博物館
19	2/17	第3回研修会	府中市郷土の森博物館
20	3/31	「多摩の博物館さんぽ」2011年度 春・夏号発行	—

表3 機関誌編集委員会

No.	日付	名称	場所
1	H22/ 10/15	第1回機関誌編集委員会	清瀬市郷土博物館
2	11/5	第2回機関誌編集委員会	武蔵村山市立歴史民俗資料館
3	H23/ 2/4	第3回機関誌編集委員会	武蔵村山市立歴史民俗資料館
4	3/11	第4回機関誌編集委員会	武蔵村山市立歴史民俗資料館
5	3/25	『ミュージアム多摩』第32号発行	—

表4 その他

No.	日付	名称	場所
1	H22/ 8/3	平成23年度共同事業助成制度説明会	東京自治会館

2	8/27	「地域博物館における市民グループ活動に関する調査」の協力依頼	—	3	11/17	平成23年度多摩・島しょ広域連携活動助成金ヒアリング	東京自治会館
---	------	--------------------------------	---	---	-------	----------------------------	--------

平成22年度企画委員会の活動について

三多摩公立博物館協議会企画委員会

東京都三多摩公立博物館協議会では加盟館より企画委員を推挙、任命し協議会でどのような充実した活動が行うことができるかを検討、実施する活動を行っている。

本年度は8館より13人(当初12人であったが後に1人追加)のメンバーが選ばれ6月16日に第一回の企画委員会を開催し企画委員長(府中市郷土の森博物館 佐藤智敬)を選出、そして各委員を①研修会班、②ホームページ班、③多摩の博物館さんぽ班に役割分担し、各班単位で活動していった。

①研修会班は年度内三回実施される研修会の内容を精査し会場、講師、内容等の調整を行うと同時に研修会当日のセッティング等に関わる。研修会の詳細は別稿にある通りだが、本年度は三博協のみではなく、図書館職員で運営される三多摩地域資料連絡会(第二回)そして千葉県博物館協会(第三回)と、他機関と共同で開催する研修会、それに伴うアンケート調査およびその集約作業等が続いたため、情報交換、内容調整の準備作業が必要となった。

②ホームページ班は、三博協の活動をいかに皆様に知っていただけるかということについて数年にわたり協議してきた結果、スタンプラリーの開催、『多摩の博物館さんぽ』の発行などを企画委員会で行って来た上でさらにできることはないかを検討した結果、三博協独自のホームページを制作することができないか、という発案から誕生した

班で、まだ結成されて数年である。しかしホームページの内容精査、業者選定、デザイン、製作の次第、製作予算(補助金)獲得などについて協議を行ってきた。年度内の導入から今後の運営方針、維持管理方法の検討などが今後の課題となる。

③『多摩の博物館さんぽ』班は、当年度の10月～翌年3月までの年度下期号および次年度4月～9月の上期号と、年度内二回の情報誌『多摩の博物館さんぽ』を編集している。加盟館の展示会その他イベント情報を集約し、デザイン、表記の統一、構成、PDFデータの作成、送付を行っている。ページ数、表記、デザインの検討などは毎回の検討課題としてあげられている。

企画委員会は、初回以外研修会開催日に合わせて開催されることが多く、その場で各班の進捗状況報告や問題提起などがなされていく。しかし班ごとに検討事項が必要である場合はその都度班単位で開催し会長館および全体の企画委員会に報告される。こうした活動のなかで事務を司る会長館にはさまざまな迷惑をかけてしまうこともある。また、限られた時間の中でじゅうぶんに時間をとることができないことも多いが、各担当が可能な範囲でさまざまな企画を練っていき、それが三博協の活動の一助になれば幸いと考えている。

(文責 府中市郷土の森博物館 佐藤智敬)

平成22年度企画委員会第1回研修会報告

企画委員 石川悦子(武蔵村山市立歴史民俗資料館)

1 研修会(学習会)テーマ

「LED照明を使った展示と照明のノウハウ パナソニック汐留ミュージアムにおける展示を事例として」

- ・実施日 平成22年9月28日(火)
- ・会場 パナソニック電気本社会議室・照明実

実

験室(パナソニック汐留ミュージアム)

ム)

- ・講師 藤原工氏(パナソニック EC 美術館・博物館担当 照明デザイナー)
- ・参加者 17名



講師 藤原工氏

2 開催主旨

平成 22 年度の研修会の内容を検討するにあたり、三多摩博物館協議会企画委員会の委員より、多くのご意見をいただきました。その中で、照明技術に関することや家庭でも普及の兆しがみられる LED 照明のことが話題となり、見学をしてみたいという施設が、数か所あげられました。そこで、実際に、製品開発・製造・販売・照明展示をおこなっているパナソニック電工本社ならびにパナソニック汐留ミュージアムでの学習会を開催しました。

パナソニック汐留ミュージアムは、2003年4月、パナソニック東京本社ビル建設を機に、4階に松下電工 NAIS ミュージアムとして開館しました。2008年10月に「パナソニック汐留ミュージアム」に改称され、フランスを代表する画家ジョルジュ＝ルオーの作品約200点が所蔵されています。作品は、「ルオーギャラリー」として常設展示されており、2010年6月にはLED照明器具を駆使した新たな展示室となりました。また、2004年5月より、今回の講師である藤原工氏を中心に学芸員照明研究会を開催し、全国から博物館・美術館の学芸員が集まり、展示と照明との関わりなどについての研修が行われています。このため、今回の学習会でも美術資料を中心とした照明方法のノウハウについての内容となりました。

3 研修会（学習会）内容

1. 「美術館・博物館照明の基礎」
 - ①光による資料の損傷について
 - ②照度とブレアについて
 - ③光源の基礎知識
2. 「光とあかりの基礎知識」
 - ①光の三原色と色の三原色について
 - ②演色性について
 - ③色温度について
3. 「LED 照明の実例と現状」・「有機 EL 照明の実例と現状」 - メリットとデメリットについて -
上記の内容について、パワーポイントを使用し、実例として施工した美術館の写真・図面を見ながら詳細な講義をしていただきました。

4 照明施設見学

- 1 照明展示室見学・・・「多種類の照明器具の演色性の違いと視覚的錯覚について」
- 2 LED 照明実験室見学・・・「絵画資料を使つての従来のスポット照明と各種 LED 照明の差と視覚について」

3 ミュージアム展示見学・・・特別展「バウハウス・



LED 照明実験室での照明方法の比較



照明展示室見学での演色性の違いについて



会議室での学習会風景

テ会議室での学習会風景イストーバウハウス・キッチン」と常設展「ルオーギャラリー」

以上のような内容で、当初3時間の予定でしたが、充実した講義と質疑応答などで4時間をこえる学習会となりました。

平成 22 年度企画委員会第 2 回研修会報告

企画委員 金井安子（調布市郷土博物館）

1 研修会テーマ

「地域資料の収集・保存・活用—多摩の地域資料学を目指して—」

- ・実施日 平成 22 年 11 月 10 日（水）
- ・会 場 立川市民会館 5 階第 1 会議室
- ・参加者 55 名

2 開催主旨

三多摩公立博物館協議会では、平成 22 年度第 2 回研修会を多摩地域の図書館協議会が組織する三多摩地域資料研究会と合同で開催しました。

地域に根ざす図書館・博物館として、地域に関わる資料を収集し、閲覧やレファレンスに供し、展示や調査研究の対象としていくことは、市民サービスの一つとして欠かすことのできない基本的な業務です。多摩地域には、特色ある資料を収集・所蔵し、それらを展示やレファレンスで活用している博物館や図書館が多々あります。さらに、独自の資料を所蔵している大学の博物館や専門博物館もあります。また、多摩地域でも公文書館機能の確立への関心が高まり、すでに取組を始めた自治体もあります。これらの館がネットワークできれば、総体として多摩に関する膨大な資料の宝庫となるのが可能で、それこそが多摩地域の研究を進めていく推進力となるのではないかと考えて、合同研修会のテーマを設定しました。

開催にあたって、各館が所蔵する地域資料に関するアンケート（地域資料の収集方針・収集範囲・収集対象、地域の特色ある所蔵資料の紹介、地域資料の取扱い、地域資料収集に関わる連携の事例、地域資料の展示・レファレンスでの活用例など）をお願いして、集約した回答集を当日資料として参加者に配りました。

次に、基調講演の概要と事例報告についてレポートします。

①基調講演「小規模自治体における複合館と公文書館機能の運営—芳賀町を事例として—」

講師 富田健司氏（芳賀町総合情報館）

芳賀町は、宇都宮市から東へ車で 30 分くらいの距離にあり、町の主要産業は農業だが、工業団地があるため、法人税収入があり、他の町村に比べて財政状況がよい。

平成 10 年代からの図書館建設に対する住民の要望、芳賀町史編さんに伴う文書館構想等もあり、結果として地域の文化活動の拠点として、平成 20 年 10 月 3 日、全国初の博物館・図書館・文書館の機能を合わせ持つ総合情報館が開館した。



富田健司氏による基調講演

総合情報館の開館後の状況は、「図書館は本を貸出するところ」というオーソドックスな図書館像の定着を目指し、博物館については民具・考古資料を中心とした収蔵庫内展示と、自主企画展や住民の要望に応じた絵画や書のギャラリーとして展示室の運用を行っている。文書館は、永年保存文書の管理、歴史的公文書の引継等を行っていることもあり行政利用を中心とするが、内外からの芳賀町に関わる歴史的文化的情報のレファレンスは、文書館が対応している。また、課題として、人員不足により資料整理が十分に進んでないことが挙げられる。平成 21 年度から緊急雇用創出事業交付金による資料整理作業を行っているが、利用者に広範に利用してもらうための資料環境を整えるには、あと 1,2 年は必要である。そして、館全体の大きな課題は、複合した強みをどのように活かすかということであり、3 者連携が今後の大きな鍵となってくる。

芳賀町の事例は、地域の資料や情報を一体的に収集・保存・活用し、生涯学習の拠点となる施設です。しかし、施設が抱える課題についても知ることができました。いわゆる M L A（Museum・Archive・Library）連携による複合施設として「箱物」ができて、専任の専門職員が不足する現状では、できることには限界もあるようです。図書館も博物館も文書館も、専任の司書や学芸員がいないので、嘱託職員でやり繰りし、時には、学芸員が図書館のカウンターで貸し出し業務に携わることもあると聞いて、いささかびっくりしました。これらの課題を克服して、全国初の総合情報館が、芳賀町の住民にとって、身近で利用しやすい施設となり、他地域に先駆けたモデルケースとなっていくことと思います。文書館について

は、ふだん、あまり話を聞く機会がありませんでしたが、公文書等の管理に関する法律が2011年4月から施行されるのに先立って、このような講演を聞くことができ、参考になりました。

■芳賀町総合情報館ホームページ

<http://www.town.haga.tochigi.jp/johokan/index.html>

②事例報告1「調布市地域資料連絡会の取り組み」

(調布市郷土博物館 金井安子・調布市立図書館 越路ひろの)

今回の合同研修会のテーマの一つでもあるMLA連携について、調布市の地域資料連絡会の事例を報告した。

調布市の地域資料連絡会は、総務課、産業振興課、図書館、郷土博物館で構成され、地域資料に関する情報を交換し、調布市に関する資料保存の重要性を訴え、またその資料を活用していこうとする連絡会である。

図書館からの呼びかけで地域資料連絡会が始まった経緯と地域資料の収集・保存について情報交換を進める過程で、「地域資料とはどんなものか」を知ってもらい、また地域資料の収集について、市の職員や市民に広くPRする必要性を痛感した結果、調布市文化会館で地域資料展を共同で開催するに至ったことを紹介した。さらに地域資料連絡会の現在の活動状況について説明した。

③事例報告2「多摩ニュータウン資料収集における市民・類縁機関との連携、協力について」

(多摩市立図書館・阿部明美氏)

多摩市・八王子市・稲城市・町田市にまたがる多摩ニュータウンは、面積約3,000ha、人口30万人という国内最大規模のニュータウンである。多摩市の図書館として、多摩ニュータウン関係資料の収集に努めてきた経緯が説明された。収集の対象とする「多摩ニュータウン資料」とは、1 多摩ニュータウンがどのようにつくられたかを知る資料、2 多摩ニュータウンがどのようなまちである

かを知る資料(多摩ニュータウンの前史や民間刊行物も含める)、3 ニュータウンとは何かを知る資料(開発一般や都市工学など)と位置づけられている。

市役所の関係各課や東京都南多摩開発事務所・都市計画局、UR都市機構などの類縁機関に協力を呼びかける一方、まちづくりを考える市民から情報が提供され、多摩ニュータウン学会と共同で講座「謎解き多摩ニュータウン」を開催するなど、資料への関心を高め収集、保存に結び付ける取り組みが行なわれた。その結果、平成21年5月のUR都市機構の事務所閉鎖に伴い、文書・写真資料・図書・マイラー原図などが図書館やパルテノン多摩歴史ミュージアムに移管された。

パルテノン多摩歴史ミュージアムと図書館との関係は、以前は地域資料の収集をめぐる「競合」することもあったが、「分け合い」「連携・協力」に代わっていった。一つの結実として特別展「開発の記録～資料にみる多摩ニュータウン」では、連携・協力により収集した資料が活かされた。

ここに至るまでには、地域住民の集会に出かけて図書館が多摩ニュータウン資料を集めていることをPRしたり、地域資料担当職員が多摩ニュータウン学会に参加したり、多摩ニュータウンについて知るための「謎解きニュータウン」という講座を実施するなど、図書館の地道な活動の積み重ねがあったことがよくわかりました。平成17年3月をもって、40年にわたる新住宅市街地開発法に基づく開発行政は終了しましたが、地域住民にとっては、まちづくりが終了するわけではありません。今後も営々として多摩ニュータウン資料の収集と活用事業が続けられていくことと思います。

参考文献

阿部明美「ニュータウン資料の収集状況について」『多摩ニュータウン研究』No.12 2010年

平成22年度企画委員会第3回研修会報告

企画委員 高橋秀之(くにたち郷土文化館)

1 研修会テーマ

「博物館が地域にできること～子ども達のために～」

- ・実施日 平成23年2月17日(木)
- ・会場 府中市郷土の森博物館 会議室
- ・参加者 31名

2 開催趣旨

研修会テーマについて、千葉県博物館協会調査研究委員会と共同で情報把握をすることとなりました。東京都三多摩地区並びに千葉県下の博物館等で行われている、子どもを対象にした具体的な取り組みを集約し、その成果

を子ども対応の事例集として各館で活用できるよう資料化するために、加盟館にアンケート調査を行いました。調査結果は以下の通りです。この結果をもとに、第3回研修会を、千葉県博物館協会調査研究委員会と合同で実施しました。

3 研修会内容

東京都三多摩公立博物館協議会では、平成22年度第3回研修会を、平成23年2月17日に府中市郷土の森博物館で、「博物館が地域にできること～子ども達のために～」をテーマとして、千葉県博物館協会調査研究委員会と合同

で開催いたしました。この合同研修会は、千葉県博物館協会側からの提案を受けまして、2回の準備会を経て、開催にいたりました。研修会を行うにあたり、両会加盟の博物館・資料館・美術館等に対しまして、学校対応（子ども対応を含む）の教育普及プログラムの内容等についてのアンケート調査を行いました。

当日の午前中は、府中市郷土の森博物館のリニューアルした常設展示室の子ども歴史街道と体験ステーションについて、学芸係長の深澤靖幸氏にご案内をしていただきま

した。午後は事例報告として、東京都三多摩公立博物館協議会側から、江戸東京たてもの園の高橋英久氏の「教育普及活動「武蔵野えどまる団」について」と八王子市子ども科学館の森融氏の「八王子市子ども科学館の活動について」、千葉県博物館協会側から、千葉県立房総のむらの神野信氏の「親子参加型体験事業の実践例」と、千葉県立現代産業科学館の小池正樹氏の「「展示・運営協力会」との連携について」の4本を行い、最後に質疑応答と討論を行いました。



千葉県博物館協議会のアンケート報告



千葉県立房総のむらの事例報告風景



研修会の様子



質疑応答風景と発表者の方々

<アンケート調査結果報告（三多摩公立博物館分：回答数 29 館、回収率 100%）>

問1 ホームページはありますか？

- ・ある：28 館
- ・ない：1 館

→ホームページが「ある」への質問。

①館独自のホームページがありますか？

- ・ある：15 館
- ・ない：13 館

②展示以外の事業についての詳細を掲載していますか？

- ・している：23 館
- ・していない：5 館

問2 教育普及担当専門の職員がいますか？

- ・いる：5 館
- ・いない：24 館

→「いる」館の詳細

- ・パルテノン多摩歴史ミュージアム（キッズファクトリーの教育普及員）
- ・多摩六都科学館（教育普及業務を民間企業に委託）
- ・国立天文台天文機器資料館（国立天文台天文情報センターに普及室があり9名在籍している）
- ・立川市歴史民俗資料館
- ・東村山ふるさと歴史館／八国山たいけんの里

問3 子ども（中学生以下）を対象とした展示はありますか？

- ・ある：17館
- ・ない：12館

※「ある」と答えた内、11館が常設展示において、なにかしらの子ども向けの展示がある。また、夏休み期間などに子ども向けの企画展を開催したり、学校のカリキュラムに合わせて、「むかしの道具やくらし」に関する企画展を行っている館もある。

問4 常設展示の解説パネルや解説シートなど、子ども向けのものを別に作成していますか？

- ・している：9館
- ・していない：20館

【工夫していること、配慮していること】

- ・学習指導要領などの内容、及び社会科副読本等との関連性と整合。子どもたち、先生方の要望の把握【羽村市郷土博物館】
- ・漢字のルビや言い回し、親しみやすい書体や文字の大きさ。知識の伝達より、触ったり、観察するなど直感的に自分で考えることができるような工夫。パネルの高さ。【パルテノン多摩歴史ミュージアム】
- ・展示解説のガイドブックを作成。文章量、言い回し、教育指導要領。イラスト。【江戸東京たてもの園】
- ・子どもが読んで参加・体験の仕方や科学的な原理や仕組みが分かるような内容で展示などを作成している。学校団体向けに「展示室学習シート」を作成・配布（HPよりダウンロード）している。【多摩六都科学館】
- ・わかりやすい表現。写真や図を多用したシートの制作。シートの内容は、展示に関するクイズ形式とし、子どもたちの興味を引き出す工夫をしている。【福生市郷土資料室】
- ・子ども向けの解説シート9種を置いています。ハンセン病問題の歴史について、9枚の解説シートで理解してもらななかで、ハンセン病という病気について、ハンセン病問題の今なお解決されていない現状について、回復者・元患者さんたちが、どのように願いをもって生きてきたのか等、理解してもらえるように工夫しています。ターゲットは小学校高学年以上ですが、大人にも好評なようです。【国立ハンセン病資料館】
- ・パネルの文字にルビをつけているほか、「こども歴史シート」を作成している。【八王子市郷土資料館】
- ・解説パネルはすべての文字にルビをつけ、文字数を少なく、かつ文字を大きめにする。そして、子どもの目線を想定し、低めにする。常設展示室の子ども向けガイドブックを発行（400円）、子ども向けのワークシート（現在5種）を発行。【府中市郷土の森博物館】
- ・解説シート、わかりやすい単語や文章で、難しい漢字にはルビを振る。【八王子市こども科学館】

問5 「年間事業予定」の中に、子どもを対象とした講座などはありますか？

- ・ある：24
- ・ない：5館

→「ある」館の詳細（複数回答可）

- ・民俗：15館
- ・歴史：1館
- ・考古：7館
- ・自然：9館
- ・科学：3館
- ・天文：7館
- ・その他：7館

※参加費については、無料が多い（入館料が必要なところは、入館料のみ）。ただし、材料などが必要なものについては、実費相当を徴収しているのがほとんど。

【事業・講座例】

- ・体験学習会「発掘体験」【羽村市郷土博物館と青梅市郷土博物館との共催】
- ・体験学習会「まゆから糸を引こう」【羽村市郷土博物館】
- ・「体験！多摩の職人（キッズファクトリー）」【パルテノン多摩歴史ミュージアム】
- ・「親子縄文土器作り」【東京都埋蔵文化財センター】
- ・「武蔵野えどまる団」【江戸東京たてもの園】
- ・夏休み子ども講座「探検！勝五郎生まれ変わり物語」【日野市郷土資料館】
- ・「ロボットをつくろう！3日間コース」【多摩六都科学館】
- ・「子供科学教室」【東京農工大学科学博物館】

- ・「小学生体験学習会」【福生市郷土資料室】
- ・「みずほはたおり探検隊」【瑞穂町郷土資料館】
- ・「夏休みジュニア天文学教室」【国立天文台天文機器資料館】
- ・親子体験講座「天体望遠鏡を作ろう」【町田市立博物館】
- ・夏休み工作体験「竹細工作り」【立川市歴史民俗資料館】
- ・「れきしかん夏まつり」【東村山ふるさと歴史館】
- ・「はっけんのもりへようこそ!」【八国山たいけんの里】
- ・自然観察会「どんぐり工作」【東大和市立郷土博物館】
- ・「昔のくらし体験事業」【清瀬市郷土博物館】
- ・「原紙古代の生活体験」【八王子市郷土資料館】
- ・自然観察会「多摩川おさかなウォッチング」【府中市郷土の森博物館】
 - ・子ども体験教室「親子で星の観察会」【武蔵村山市立歴史民俗資料館】
- ・「はたおり教室」【小金井市文化財センター】
- ・「藍の生葉染め」【五日市郷土館】
- ・「浅川化石観察会」【八王子市こども科学館】
- ・「われら稲作人」【くにたち郷土文化館】
- ・「深大寺赤駒づくり」【調布市郷土博物館】

問6 出前講座など、学校などの依頼により適宜行っている子どもたち対象の講座、メニューを用意していますか？

- ・している：19館
- ・していない：10館

問7 年間の小・中学校の団体対応の件数、および利用延べ人数は？

- | | | |
|--------|------------------|----------------|
| 【件数】 | ・1～19件：15館 | ・20～50件：6館 |
| | ・50～100件：4館 | ・100件以上：4館 |
| 【延べ人数】 | ・1000人以下：16館 | ・1001～5000人：6館 |
| | ・5001～1,0000人：3館 | ・1,0000人以上：4館 |

※100件以上の館

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| ・多摩六都科学館：184件、約15,000人 | ・羽村市郷土博物館：199件13,781人 |
| ・東大和市立郷土博物館：約150件、約12,000人 | ・府中市郷土の森博物館：227件、23,428人 |

問8 学校訪問、パンフレット配布など、館（地域）で行う講座などの事業を、小・中学校教員、児童生徒等を対象として具体的にアピールするための手段がありますか。

- ・ある：16館
- ・ない：13館

問9 館（地域）に、小・中学校教員がメンバーとなっている博物館運営推進のための組織がありますか？（博物館協議会を除く）

- ・ある：3館
- ・ない：26館

→組織が「ある」への質問。

①組織の具体的活動状況について

- ・つい最近できたばかりで活動成果が挙がっていないが、郷土博物館協議会委員7人（うち1人が市立小学校長）に1人の市民を加えた組織がある。今後、月一回程度会合が開かれるようである。【清瀬市郷土博物館】
- ・多摩六都科学館理科教育研究懇談会という名称で、圏域5市（小平市・東村山市・清瀬市・東久留米市・西東京市）の理科教育担当教員を委員として構成。小学校部会と中学校部会に分かれる。平成21～22年度にかけて計5回会議を開催。展示物更新のテーマやアイデア、プラネタリウム学習番組の方向性について検討いただき、提言としてとりまとめていただいた。【多摩六都科学館】
- ・必要時に、理科教員による「学習番組制作検討委員会」などを組織して、学習用プラネタリウム番組制作時などに内容に対して意見をいただく（番組が完成した後、学年で、見学で来館してもらうことにより、利用者の増につながる）。【八王子市こども科学館】

②その組織により、地域の学校との連携が促進されたり、館の利用が増えたりしていますか？

- ・はい：2館
- ・いいえ：1館

10 学校や子どもの博物館利用について、ご意見・ご提案はありますか？

・昨今、児童・生徒が自然とふれあえる場や、理科に関する実体験の機会の減少により、子どもたちの「理科離れ」が現代教育における喫緊の課題となっている。原因は様々に考えられているが、多忙な教員がなかなか授業の準備に時間を割けず、理科でありながら座学中心の授業になりがちなのも原因の一つと言える。

「実験の手順や失敗しない実験方法、授業で実践できる教材や安全な操作方法などを具体的に指導してほしい。との教員側の声もあり、当館ではこうした部分を補うべく、教員セミナーを実施している。また、多摩六都圏域5市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）の教育委員会から推薦された委員6人により構成される「多摩六都科学館理科教育研究懇談会」により、学校教育における理科学習の課題や、教育現場への科学館の効果的な活用方法などが検討されているところである。

新たな学習指導要領における科学館の役割を踏まえた上で、地域に根ざした科学館として、授業に活かせる理科実験の手法をはじめ、学校教育を側面から支援できるよう、様々な手法でアプローチしていきたい。またこうした取り組みについて学校をはじめとした教育機関へ広くPRすることも肝要である。【多摩六都科学館】

・学年によっては、社会科見学などで、雨の時に昼食ができる場所としても、利用の要望がある。【八王子市子ども科学館】

・当館の場合、学校へのアウトリーチ活動（出前授業・出張展示など）は、開始してから2～3年なので、いろいろな課題がある。当館の活動PRはもちろんであるが、こうした活動への学校・博物館両者のコンセンサスの問題もある。アウトリーチ活動は、単なる授業の穴埋めとしてではなく、先生とのしっかりした意思

疎通のもとにおこなう両者に実りのあるものにする必要があるが、両者多忙のため相談時間が取れないことが多い。また、依頼が突然生じることも多く、学芸員の負担が増えるきらいもある。こうしたことを解決するため、今後のプログラム・システムの見直しが必要だと考えている。

当館の場合は、別室に子供向けの「キッズファクトリー」を開室したため、歴史ミュージアムとキッズファクトリーの連携が必要だと考えている。

子供向けシートや、歴史ミュージアム内の展示における子供向け展示については、まだ手付かずの部分が多く、今後の課題だと感じている。

教育普及担当職員は、現在のところキッズファクトリー専任だが、今後歴史ミュージアムなどの展示助言もできるような形が必要だと感じている。また、エデュケーターとして成長するための専門的な研修が必要だと感じている。

【パルテノン多摩歴史ミュージアム】

・郷土の歴史を学ぶということは大切なことです。机上の学習だけでなく、「見て、さわって、学ぶ」ということが重要なことだと思います。今後は学校との結びつきを強め、子どもたちを対象とした事業に積極的に取り組んでいきたいと考えています。【青梅市郷土博物館】

・子どもたちに郷土の歴史や展示に興味をもっていただくような事業を心がけている。【福生市郷土資料室】

・子供向けの展示・出前キットをそろえたり、子供向けガイドや出前授業用貸出リストなどがあると便利だと思います。【瑞穂町郷土資料館】

・学芸大附属小学校では、地域の歴史を調べる宿題が出ることもあるようで、その時のみ、親子連れの入館者が増える。ただ、子供の興味を引き出すよりも、親がテーマを選定して質問も親からというのが現状である。【小金井市文化財センター】

・子どもが展示を見学したり、行事へ参加する場合、子どもの意思で、子どもだけで参加するというのは稀と思われる。情報提供は保護者経由・学校経由になるため、親向け・教諭向けを意識したPRが必要である。

学校の利用については、教諭の「博物館活用格差」が大きいことが感じられる。見学だけでなく、教材・事前調査などに博物館資料を用いる教諭もいれば、異動したてで博物館の存在すら知らない場合もある。【日野市郷土資料館】

・団体見学の事前申込みをいただければ案内見学をします。また、ボランティアの方の都合がつけば繊維機械類の動態展示もご覧いただけます。無料館です。【東京農工大学科学博物館】

・当館が市内小学校と連携する行事に3年生を対象とする社会科見学があります。内容は立川市の簡易な歴史説明

と民具当てクイズ（名称と使用法）及び展示資料（農家の模型と養蚕を中心に）を解説します。

体験学習では保護者同伴で参加可能な内容のものを1年度に8回開催しています。これらに参加した経験者でも再来館するのは近隣の小学生に限定され、遠方のケースでは少数で、保護者同伴となるようです。社会科見学内容の充実を図りたいと考えています。【立川市歴史民俗資料館】

・当館は、全体の展示スペースが狭いため、子ども専用の常設展示・解説書等は設置をしていません。しかし、主な個人来館者は、当館裏手の狭山丘陵とそれに付随する公園施設、温泉施設の利用のついでに立ち寄るケースが多く、家族連れの未就学～10代の入館者率が非常に高い傾向を見せています。いつでも子どもが楽しみながら学べる展示コーナーの設置については、当館の課題でもあります。

学校などによる団体見学については、「むかしの暮らし」の体験学習のための小学校第三学年が中心ですが、これについては副読本の関連もあるため、毎年同じ資料を使用している状況です。しかし、年々資料の劣化は免れず、代わりの資料もありません。学校側が何を求めて、何を必要としているのか、受入れ側としても限界があるため、体験学習の目的・内容についてはじっくりと協議をする必要性を感じています。学校側への要望としては、来館する前に見学のマナーを学習してから見学にきていただきたいと思います。役所内において学校と資料館施設は所属部署が違うため、なかなか交流をもつ機会が少ないのが現状です。子どもを軸に置いた、スムーズな学習体制を作り上げていく努力が必要ではないかと思います。それによって、幅広い学年に活用される施設となっていくのではと感じています。【武蔵村山市立歴史民俗資料館】

・博物館の子ども向け事業について「このようなものがあります、できます」という一覧（メニュー）を現状完全には用意できていません。また、貸出、出前授業用キットのようなものを準備しておくこと、それらをHPなどでも情報発信することが今後必要かと考えます。

学校単位ではない子ども対象の事業については、事業進行の管理上、保護者同伴を前提としている場合が多いです。また、中学生まで参加対象としているものでも事業も大半は小学生の参加となる場合が近年増えているように思われます。【府中市郷土の森博物館】

・学校の受け入れについては、どこまで積極的にPRすべきか悩むところもあります。先生から主体的な提案があった際には、積極的に対応する姿勢を取っているため、各学校とのパイプ作りが今後の課題です。【くにたち郷土文化館】

☆ 会員館活動報告

東村山ふるさと歴史館のホームページと平成22年度事業

東村山ふるさと歴史館 宮沢美和子・高野宏峰

東村山ふるさと歴史館のホームページ



リニューアル前の特別展ホームページ

東村山ふるさと歴史館が開館したのは平成8年です。当時、世間的にホームページは知られていなかったものの、館や市でホームページを持つことは想定されていませんでした。その2年後、東村山市がホームページを導入したのに伴い、ふるさと歴史館でも各課ページを持ち、数度のデザイン改変を経て現在にいたっています。

ホームページ作成にあたって心がけたのは、更新頻度と基本情報の充実でした。まず、展示や講座のおしらせなど市報と同内容のものをホームページに掲載、これを見て遠方から来館された方も現れ、情報発信の大切さを痛感しました。また、『東村山市史研究』の内容一覧・『はっちこっく通信』のバックナンバー公開など、紙媒体を補うことにつとめました。

東村山市は平成23年2月15日より、ホームページの全面リニューアルを行ない、東村山ふるさと歴史館のホームページも生まれ変わります。ホームページを通じて市の情報を得る全ての利用者に対し、分かりやすく・使いやすいホームページを作ることをめざし、音声読み上げソフトに対応するなどアクセシビリティに配慮したページデザインにつとめました。また、コンテンツマネジメントシステム (CMS) を導入し、市職員にHTMLの知識がなくともホームページの編集ができるようになりました。

今後は『歴史館だより』『ふるさと歴史だより』『展示解説シート』の閲覧もできるようなページなどを順次追加していければと思います。

平成22年度の主要な事業

展示事業としては、夏の企画展「湖郷一狭山丘陵の湖「多摩湖」「狭山湖」をめぐる5つの話」や秋の特別展「鎌倉街道と中世のみち一狭山丘陵の中世」などを開催しました。ともに狭山丘陵という市周辺地域を題材にとり、周辺自治体の協力も得て展示にこぎつけることができました。また、東大和市立郷土博物館との共催事業である「狭山丘陵市民大学」では、狭山丘陵の東と西に通るそれぞれの鎌倉街道を多数の参加者と歩きました。

市民との協働による事業としては、今は無き「かやぶき民家園」以来、年中行事体験事業「まゆ玉かざり」や「しめ縄づくり」を実施しており、しめ縄づくりについては養成講座「しめ縄づくりマスター」を開講しており、「れきしかん夏まつり」では「わらじを作ってみよう／履いてみよう」を、小学校への出前授業ではしめ縄づくりを協働しました。歴史館が開館してから開講した機織講座「村山餅を復元しよう」では、子どもはたおり体験を協働しました。

また、分館である『八国山たいけんの里』は開館2年目を向かえ、月ごとのテーマに基づくほんかく体験・ちよこつと体験を実施しました。

ほんかく体験では、主に季節ごとの自然観察会、ネイチャーゲームなどの自然体験、縄文時代の生活をテーマに土器づくりなどの考古体験、お月見会での昔語りや園内での畑で採れたサツマイモによる芋フェスタの開催など、伝統文化や年中行事にまつわる体験、草木染めや草細工など自然素材を用いた工作など、毎月さまざまな体験イベントを実施しました。

一方、いつでも体験できるちよこつと体験では、年間を通じて毎週土・日曜日に実施している「縄文弓矢たいけん」をはじめ、「昆虫折紙・切り紙」「編み組みウチワづくり」「ドングリトロづくり」などの工作や、「コイノボリ短冊」「ペットボトルでつくるアートな七夕かざり」「八国山絵馬づくり」などの参加型展示を実施しました。

さらに「八国山たいけんの里」開館1周年と近接する遺跡公園「下宅部遺跡はっけんのもり」開園6周年を記念した「アニバーサリー」イベントや、6月の「北山公園菖蒲まつり」、11月の「東京文化財ウィーク」にあわせたイベントも実施しました。

こうした体験イベント実施の際には、市民によるサポートボランティア「はっちこっくメイト」が指導、補助を行いました。特にはっちこっくメイトガイド部会によ

る収蔵展示スペースの「下宅部遺跡」ガイドは好評を得ました。

このように、東村山ふるさと歴史館、八国山たいけんの里ともに両施設の特性を活かした事業を実施しました。

八王子子ども科学館のホームページと平成22年度事業

八王子子ども科学館（サイエンスドーム八王子）

子育て世代に有効なホームページでの広報

当館の对外広報は、市広報、館のパンフレット、プラネタリウムのパンフレット、学校を通じて小学生に配布するチラシの紙媒体のものと、ホームページ、それと報道機関へのパブリシティがあります。

土・日・祝日には、何かしらの工作教室等を開催しており、ホームページには全ての講座を掲載しています。

当館は市直営であるため、館独自のサーバーを持つことができず、ホームページの様式も市で統一された様式となっています。このため、他館などで拝見する、科学館オリジナルのレイアウトにすることができません。

また、市のトップページから入ると、当館のホームページは階層が深いとことにあり、探しにくいという苦情もありました。これを受けて、ホームページ担当課にお願いをし、市のトップページにバナー（ボタン）をつけてもらいました。この先、市のホームページのリニューアルが予定されており、このバナーについても変更になるかもしれません。

当館のホームページは、約10年前の開設以来、ページを継ぎ足しながら作成してきて、見づらくなっていたものを、22年11月に、トップページをシンプルにして、交通案内や休館日などを別ページへ振り分け、よくある質問を設けるなど、リニューアル

しました。

ホームページの閲覧から、どれくらいが来館につながっているのかなどのアンケートはおこなっていませんが、閲覧カウンターをモニターすると、休日前の金曜日や土曜日の閲覧数が伸びていることがわかりました。

当館の土・日・祝日の主な利用者は、小学生とその親で、日常的にコンピュータを利用している世代です。

これら家族が、休日のお出かけ場所として、プラネタリウム番組や開催される工作教室などの講座についてチェックをしているものと考えられます。

22年年7月にプラネタリウム番組 HAYABUSA 延長を決定した折には、パンフレットの印刷が間に合わず、市広報とホームページのみでの周知となりましたが、はやぶさ人気もあって、ホームページとクチコミで、観覧者は前年度同時期の1.4倍となりました。これも、ホームページの有効性が実証された例だと考えています。

冒頭に記しましたように市内の小学生全員、約3万人に庁内印刷の行事チラシを年間何度も配布しますが、これを行うと、来館者やイベント参加者が増えるので、ホームページと合わせて、紙媒体による積極的な広報も必要だと考えています。

☆ はやぶさブーム

国民的ブームとなった小惑星探査機はやぶさ。当館でも平成22年は、はやぶさの年となりました。

1月16日、プラネタリウム新番組「HAYABUSA—BACK TO THE EARTH」がスタート。この頃、はやぶさは11月のイオンエンジンの故障を克服し、順調に地球に向けて飛び続けていました。カプセルの地球帰還は6月の予定。番組の終了もこれに合わせて、当館の通常の番組切り替え時の7月11日までとしました。「はやぶさが地球に近づくにつれてブームになり、お客さんが増えて大入りになり、カプセルが地球に帰還して、ブームは終了。7月11日までが最良の選択・・・」これが当初の予想でした。

森 融



平成22年6月13日 はやぶさの地球帰還オーストラリアで大西浩次氏撮影

3月7日には講演会「帰ってくる小惑星探査機はやぶさ」を開催しました。講師は、はやぶさの電池の運用を担当されている JAXA の曾根准教授。20年9月にも講演をお願いし、その時に、はやぶさの電池の担当とお伺いしていたので、HAYABUSA を投影する時には、ぜひおいでいただこうと計画した講演会でした。講演をお願いした時に、オーストラリアでのカプセル回収チームにも入っておられるとお伺いし、さらに期待がふくらみます。

当日は申し込み不要として、参加者は185名でした。打ち上げからカプセル帰還まで、オーストラリアでのカプセル回収など、帰還の正確な日時や場所が、まだ非公開の時点でしたが、帰還が待ちどおしくなる内容でした。

講演の最後には曾根先生から、「カプセル帰還後に、ぜひもう一度講演会をやりましょう。」とお話があり、満場の拍手で講演は終了しました。

その後、カプセルの帰還が6月13日と発表され、その日が近づいてきますが、予想に反してお客さんの増加は、緩やかでした。反対に、カプセルの帰還後もお客さんは全く減りません。

この頃、黒須八王子市長も HAYABUSA を観覧され、その後市広報7月1日号1面の市長メッセージに、はやぶさの帰還やオーストラリアでのカプセル回収、当館の番組について書かれました。

当初の見込みと違い、HAYABUSA の人気はカプセル帰還以降うなぎ昇りで、お客さんからの要望も多く、声に応えるためにも7月11日で終了するわけにはいきません。しかし次に投影する番組も決まっています。パンフレットの印刷も最終校正が終わっており、HAYABUSA を続行するにも、どの時間帯で投影するかも問題になってきます。

そこで思案の結果、7月17日からは毎日最後の投影の銀河鉄道の夜の時間帯で今夜の星空の解説をやめて、銀河鉄道の夜+HAYABUSA の2番組を投影することとしました。この情報はパンフレットには載せられず、市広報7月15日号とホームページのみでの周知となりました。

7月1日に市長メッセージが掲載された広報が発行されると途端に問い合わせが多くなり、7月3日

の土曜日は朝一番の投影に約200人が来館され驚かされました。

7月17日、2本立てがスタートすると、投影時刻の前に大人の方が続々と来館するようになりました。

銀河鉄道の夜は宮沢賢治原作で、それまでのプラネタリウム番組の常識を覆す臨場感と美しさが評判で、全国で投影されて人気が高い番組です。これに合わせて国民的ヒーローはやぶさの2本立てが、1回の料金で見ることができるというお得感もあったようで、ホームページとクチコミのみで、連日の大入りとなりました。

7月17日から10月11日までは、他の番組も「よみがえる恐竜の世界」「ドラえもん」という強力ラインアップで、複数番組を観覧される方も10%近くあり、観覧者数は昨年同時期の1.4倍の約21000人を記録しました。

カプセル回収後の曾根先生においでいただき講演会は9月11日に決定し、8月15日号の市広報で募集を開始。折からのはやぶさ人気により電話で申し込みとしましたが、わずか4日間で255席が満席になりました。

当日は曾根先生とともに、JAXAの3名の先生においでいただき、それぞれの専門分野のはやぶさの話をしていただきました。2時間もの長い講演会でしたが、皆さん熱心に聴き入っていたのが印象的でした。

HAYABUSA は10月11日で終了する予定でしたが、まだ人気が高いので、さらに延長することにして、今度は当館で制作したオリジナル番組「日本の宇宙開発～ペンシルロケットからはやぶさまで」を一緒に投影しました。この番組は小学校の学習番組として、曾根先生にも出演いただいて、21年度に制作したのですが、急きょ一般番組へコンバートです。この組み合わせは23年1月10日まで投影し、これでHAYABUSA の投影を終了しました。

これらにより今年度1月末までの入館者数は約70500人と、日食ブームで来館者が多かった昨年度の同時期までの約62600人を上回り、3月末までの年間入館者数も過去最高の80000人に迫っています。

特別展「お稲荷さんの世界」の開催

府中郷土の森博物館 佐藤 智敬

日本全国津々浦々でまつられているもののひとつに、お稲荷さんがいます。神社、寺院、祠、屋敷神などさまざまな形でまつられるとともに、眷属とされる狐の愛好者も多い。稲荷神社、稲荷様、お稲荷さんなどと呼ばれ親し

まれ時には恐れられ、近世には江戸で大流行している。その影響は多摩地域にもおよび、府中にも多数分布している。2月の初午の際、五色の幟に「正一位稲荷大明神」と記し神社や屋敷神にまつられる稲荷に奉納し油揚げや

イワシの目刺を供える光景は、府中市内でも担い手等、変更していることもあるが、健在だ。

そんな稲荷について、どのような歴史を経、どのような分布、性格があるのかを考察した展示会「お稲荷さんの世界」を当館で開催することができた。会期は2010年5月1日～6月27日の間で、関連企画を含め5000人を超える方々に来場していただくことができた。

総本宮と言われる伏見稲荷大社を中心とする稲荷祭祀の歴史、豊川稲荷、最上稲荷、笠間稲荷などのいわゆる三大稲荷、五大稲荷と呼ばれるものや八王子で「萌え寺」として知られる寺院で祭祀されている稲荷、狐の行列をモチーフに街おこしを行っている北区王子など、現在も各地に伝わる有名な稲荷の紹介、そして府中市内の稲荷、初午祭の歴史と現状についても紹介することができた。市内はもちろん、東北地方や関西、九州、山陰などからもこの展示会のためにご来館くださった方がおられたことが有難かった。

稲荷のどのような世界を披露するかのもっとも大きな課題であったが、重要文化財や古美術品のような展示よりも、素朴に人々がお守りのように扱っている軸や狐像などの授与品、絵馬類、館蔵品としての祠や家々に伝わる文書などを通してその多様性を表現



展示室入口に稲荷を象徴する朱鳥居を連ねる造作が好評だった

することを試みた。

多様すぎるゆえ、稲荷がこれまでメインテーマとして扱われてきた展示会は管見の限りなく、日本初のお稲荷さんの全体像を扱い、同時に府中の稲荷を具体的に紹介できたと自負している。

なお、展示会の内容に沿ってブックレット『お稲荷さんの世界』(A5版80ページ)が発行され好評を得ていることも付記しておく。

2010年度の町田市立博物館の活動について

町田市立博物館 矢島 律子

「町田市の博物館等の新たなあり方」をめぐる動き

町田市立博物館は1973年に開館して、今年で37年になります。空調を初めとする諸設備の老朽化・故障に加え、館蔵資料の増大に収蔵庫の狭隘化が深刻な問題となっています。加えて第一世代の学芸員の定年、退職が続き、その実績の引継ぎや欠員補充の問題が十分に解決されていません。通常の公務員採用の学芸員4人で活動して来ましたが、昨年若い学芸員が一人退職した後は、再任用1人、5年任期採用1人、通常の公務員採用の学芸員は1人だけ、という状況です。博物館変革の時代といわれている昨今、本来は、社会状況の変化と博物館に対する社会の要望の変化に合わせて、展示活動や普及活動を拡大、改革していかなければならないにもかかわらず、スタッフは上記の問題への対応に多くの労力を取られ、本来の課題に十分にに取り組むことが難しい状況にあります。ある種、負のスパイラルに入り込みかけています。

こうした当館の状況が契機となり、当館だけでなく町田市全体の博物館機能自体を見直し、新たなあり方を検討するための委員会が2008年に立ち上げられ、2008・2009年度は町田市庁内の関連部署により、また2010年度は外部の有識者で構成された「町田市の

博物館等の新たなあり方構想検討委員会」により、討議が重ねられてきました。2011年度には本年度末の答申に基づき、さらに具体的なプランが組み立てられていく予定です。

町田市立博物館2010年度の活動

一館外での展示活動

町田市立博物館の今年度の活動は、こうした動きにあわせたものになりました。長年整理が行き届いていなかった考古資料1万余点と図書資料2万点弱を国の緊急雇用創出事業の補助金をいただいて整理、データ化する作業を進めました。これによって、今年度末には約4万点の館蔵資料がほぼ100パーセントデータ化され、収蔵品管理システムに登録されます。その全貌が明らかになり、今後考えられる多様な展開のための素材が整います。試験的な展示活動も行いました。膨大な考古資料を整理するための場所を確保する苦肉の策として、5月から12月まで町田市立博物館での展示を休止して展示室に資料を広げて整理作業を行い、展示活動は館外で行いました。

『町田の植物』展は夏休みにあわせた展覧会で、市内の薬師池公園にある町田市フォトサロンと町田市立金井

小学校で行いました。博物館の立地条件や学校教育との連携のあり方を探ることを意図しました。また、秋には市内常磐町にある桜美林大学と連携して、桜美林資料展示室にて『町田市立博物館』展を開催しました。桜美林大学の博物館学授業とリンクさせ、展覧会企画から展示までの業務を学生と学芸員の共同で行いました。立地の条件と大学や地域との連携のあり方を探ることを意図しました。

—普及活動の新たな試み

展覧会にあわせて企画するイベントに関しては数年前からさまざまな工夫を凝らしています。今年度の『町田の植物』展では、数年前から始めている大学との連携事業として、玉川大学芸術学部メディア・アーツ学科の学生たちが田中敬一教授の指導の下、金井小学校生徒とのワーク・ショップを開催し、光アートを小学生とともに製作して、その成果を金井小学校における第2部展示において「輝く希望・カナイ植物園」として発表しました。

さらに、博物館に求められる機能の一つに地域の文化資源として地域の活性化に対する寄与があるという観点から、新たな試みを加えました。

昨年度末から5月のゴールデン・ウィーク明けにかけて開催した館蔵美術工芸品展『花の華』展では、最寄りの駅である小田急線玉川学園駅周辺地域との連携をテーマに、玉川学園町内会80周年事業の一環として「玉川学園小さなギャラリー会」が主催するギャラリー・ウォーク「雛めぐり」に加わって、玉川学園住民が大切に保管してきた思い出の雛飾りをホールに展示しました。

また、町田市主催の「町田さくらまつり」に同ギャラリー会とともに参加して、イベント「毎日どこかでコンサート」を行いました。期間中玉川学園地域のギャラリーのどこかで毎日必ずプチ・コンサートを行なって、市民の桜めぐりを盛り上げるという企画です。当館では桜に因んで平家琵琶演奏会「平忠度都落」を開催し好評を博しました。

ゴールデン・ウィーク明けには、玉川学園の文化資源を巡る「新緑のミュージアム・ウォーク」を行いました。玉川大学教育博物館と漢学関係の書籍収集と研究を行っている財団法人無窮会図書館との連携事業です。当館の『花の華』展を担当学芸員の解説とともに鑑賞した後、玉川大学教育博物館で開催中の『現代能面・狂言面3人展』を作家とともに鑑賞後、無窮会図書館にて研究員による図書館概要解説と館蔵古書画特別観覧を行いました。約6時間、丘を上り下りしながら10キロ近くにわたるウォーキングでしたが、さわやかな五月晴れに恵まれたこともあり、参加者は大変満足されていました。

今後の活動と将来への展望

町田市立博物館の学芸スタッフは非常勤を含めて最大4人です。4万点を超える館蔵資料の管理・保全とそれらを活用した収藏品展および企画展を、今までどおりのペースで年6～8回開催しながら新たな普及活動を加え、さらに、新しい博物館構想を推進するというのは現実的でないという意見もあります。状況の進展をにらみつつ、町田市立博物館の新たな姿への移行を潤滑に進める道を確保していこうと考えています。

「皇国地誌・西多摩郡村誌」の復刻にあたって

青梅市郷土博物館 鈴木 章久

青梅市郷土博物館では平成21年度および平成22年度の二ヶ年をかけて、長らく絶版となっていた「皇国地誌・西多摩郡村誌」の青梅市域部分を上下二巻で復刻いたしました。復刻するにあたり、当館で原本を収蔵している地誌については校正作業を行ない、できる限りの修正を行なっています。

「皇国地誌」は明治時代初期に政府の命令により全国で編纂が行われた地誌ですが、未完成のまま編纂事業が中止となりました。その時点で集められていた各地の地誌の原稿は東京帝国大学図書館に保管されていましたが、残念ながら関東大震災によって焼失してしまいました。

しかし、未提出の原稿や副本、草稿などが各地に残存しており、それらを基に様々な形で復刻が行われています。青梅でも「多摩郷土研究会」や「旧都立青梅図書館」が一体となって副本や草稿の調査・収集が行われました。収集された地誌は旧都立青梅図書館に収蔵され、現在は青梅市郷土博物館で収蔵しています。



皇国地誌・西多摩郡村誌（上）（下）

現在の青梅市域を含めた西多摩地域の地誌編纂は、その大半が神官で国学者でもあった齋藤眞指によって行わ

れました。齋藤眞指が編纂した地誌は「齋藤地誌」とも呼ばれ、郷土史家の間で早い時期から注目され、活用されてきました。注目すべき点はその記述量の多さです。他地域で残存している地誌と比べて内容が充実しており、

資料として大変優れています。

今後、青梅の事を調べるために必要不可欠な資料として、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

平成22年度の活動報告

調布市郷土博物館

鬼太郎の街・調布から、「ゲゲゲの〜」に沸いた1年

平 自由

平成22年度は、調布の名誉市民である水木しげる氏の奥様武良布枝さん原作のNHKの連続テレビ小説「ゲゲゲの女房」の放映に始まりました。秋には水木氏が文化功労者として表彰され、暮れには、「ゲゲゲの〜」が新語・流行語年間大賞に選ばれ、何かと調布が注目される中で、博物館も関連した事業に取り組みました。

企画展「映画・漫画に登場する近藤勇」

7月から9月に開催した展示では、調布出身の近藤勇について、東洋のハリウッドと呼ばれた映画の街である調布の歴史とともに、映画に登場した勇の姿を紹介しました。また、水木氏が近藤勇を主人公にした漫画「星をつかみそこねる男」をはじめ、多くの漫画家に描かれた勇の姿をたどりました。

「妖怪漫画の世界を語る ～鬼太郎の街・調布から～」

10月には、文化会館でフォーラムを開催しました。基調講演として「妖怪漫画と水木しげる」を妖怪研究家の多田克己氏、「日本の漫画文化と未来」を明治大学の斎藤宣彦氏が講演し、漫画家の藤田和日郎氏、現代マンガ図書館長の内記稔夫氏、水木漫画研究家の山口信二氏が加わり、「妖怪漫画の魅力と漫画文化を語る」をテーマにそれぞれの立場から発言していただきました。会場で、藤田氏の記念色紙の作画も飛び出しました。

調布市におけるMLA（博物館・図書館・文書館）連携の取り組み

金井 安子

はじめに

調布市では、地域資料の積極的な収集や活用のために関係各課（総務課公文書管理係、産業振興課、図書館、郷土博物館）が情報交換するための連絡会を定期的に実施しています。

この地域資料連絡会は、平成18年に図書館からの呼びかけがきっかけで始まりました。第1回の連絡会では、図書館から博物館に対して、人材情報（資料所蔵者、所蔵者との仲介者、研究者、ボランティア）は、どのように把握しているか、地域の資料の所在情報を知りたい、博物館の今後の事業予定についていち早く知りたい、博物館で収集・整理中の資料についても知りたい、パンフレット・図録などが無い過去の展示の記録はあるか等々、さまざまな質問が出ました。連絡会を開催するまでは、職員の個人レベルは別として、こういったような情報を



フォーラムチラシ



展示会チラシ

展示会「明治・大正・昭和 調布ゆかりの漫画家たち」

11, 12月、(財)調布市文化・コミュニティ振興財団との共催で、江戸時代末に深大寺大師堂に天井画や板絵を描いた河鍋暁斎、明治時代末から昭和にかけて風刺漫画を描いた地元の原信天、市内に長く住んで作品を描き続けている高井研一郎氏など、ゆかりのある漫画家の作品を通して、調布と漫画の関わりをたどりました。

また、関連事業として「漫画の歴史 ―日本は何故マンガ大国になったか―」と題して、漫画史研究家の清水勲氏による講演会を開催しました。

交換する機会がありませんでした。

市民からの地域に関する問合せ件数については、庶務課歴史資料係（現在は総務課公文書管理係）、郷土博物館とも1ヶ月に数件程度ですが、図書館には多くの問合せが寄せられていることがわかりました。図書館は開館時間が最も長いことから、市民の利便性も考慮して、図書館に問合せと回答の情報を蓄積して、同じような問合せがあった時には、回答事例を参照できるような仕組みを作ってはどうかという意見が出ました。

地域情報の総合化・体系化

地域資料の収集強化のために、まず、市の職員に対して、メールやチラシで資料収集に協力してもらうよう呼びかけること、呼びかけるならば、3月が異動や退職の時期なので、よいタイミングではないかと話し合い、早速、実行に移しました。

第2回から産業振興課が連絡会のメンバーに加わったことによる科学反応もみられました。市の職員は、かつて地元出身者が多かったのですが、地元率は次第に減っています。だからこそ、職員も調布のことをよく知る機会が必要ではないか、職員も市民も、調布のことを楽しみながらもっと知ることができればよいのではということ話し合いました。産業振興課でも、調布市の地域活性化のために、「調布学」のようなことをちよūd考えていたところであり、課を超えて協働できればよいとの考えが示され、後に『調布市産業振興計画』（産業振興課平成19年3月）の中に、「調布学講座」という項目が盛り込まれることになりました。将来的には、さまざまな調布市の地域情報を総合化、体系化して、「調布学」「調布検定」のような形にまとめていけたらという試みへの第一歩です。

調布市地域資料展の開催へ

調布市に関する資料を保存していくことは、これからの調布市の歴史を記録していく上で、大変重要です。どこかが代わってやってくれるというのではなく、調布市が責任を持って集めていかなければなりません。そのために今まで資料を収集する努力を続けてきました。貴重な資料を今後も収集していくためには、市民や職員の協力が不可欠であるため、調布関係資料（地域資料）にはどんなものがあるかを具体的に展示することで理解してもらえれば、より多くの人に協力してもらえるのではないかという期待を込めて、平成21年11月21日から29日まで、調布市文化会館たづくりのギャラリーを会場として、「調布 S a i (再・彩) 発見～蔵出し！地域資料展」を開催しました。

これは、地域資料連絡会の各課が共同で展示と関連講演会を行ない、それぞれが収集・保存してきた資料を初めて公開し、広く地域資料の収集を呼びかけるために企画した展示です。展示には、「こんなものも地域資料にな



地域資料展（イベントのポスターやグッズの展示）

るのか！」と、改めて気づくような資料を選びました。たとえば、産業振興課からは花火大会のグッズ、郷土博物館からは成人式の記念品や市制施行周年事業の記念品、図書館からはさまざまなイベントのポスターや新聞折込みチラシなど。あわせて調布市在住の風景画家中川平一氏が45年にわたって描き続けてきた作品も地域資料として展示しました。これらを通して、調布というまちを「再発見」することを目指しました。

来場者から寄せられたご感想・ご意見には、次のようなものがありました。「催事のポスター、うちわ、成人式の引き出物、商店のチラシ等は捨ててしまえば残らないのですが、展示されたものを見ると、重要な歴史資料である事が再認識させられました。」「いままで地域資料などにはあまり興味がありませんでしたが、このような展示会を開いていただけると地域資料という物がどのようなものかわかり、興味をもつことができました。」

平成22年度は、「ゲゲゲ」ブームで賑った調布市のさまざまなイベントの記録や作製されたグッズの収集・保存を連絡会が連携しながら進めました。

平成22年度の活動報告

瑞穂町郷土資料館 近藤 春香

瑞穂町は、昭和15年（皇紀2600年）に箱根ヶ崎村・石畑村・殿ヶ谷村・長岡村が合併し、「瑞穂町」として町制施行されてから、平成22年11月10日で70周年を迎えました。

瑞穂町郷土資料館では、町制施行された昭和15年当時を振り返り、「昭和15年頃の我が村の暮らし-当時の青梅街道を行く-」と題し企画展や郷土歴史講演会を開催しました。

今回の企画展では、あらたに町の誕生を記念した「瑞穂町々制 奉祝紀二千六百年」と書かれた拍子木や町全体を上げて祝賀行事を行った様子の写真などを展示し、来

館された方々が親子3世代で楽しんで頂けたと思います。

そして歴史講演会では、瑞穂町文化財保護審議会会長村山美春氏より、町制施行当時の瑞穂町の様子が解説され、多くの方にご好評を頂きました。

また、これらに関連



し、村山美春氏にご協力を得て、昭和15年当時の青梅街道の様子を親しみやすい読み物風にした小冊子をまとめています。

その他に資料館では、郷土の伝統的な絹織物「村山大島紬」の周知・技術の保存・織子の育成を目的に、今年度より瑞穂町在住の小学生～大人まで、全5回の機織りや染色（草木染め）体験教室を行いました。

村山大島紬の歴史学習から始まり、簡易機と村山大島紬専用の手織機との織り方の違いを体験、天然植物素材を煮炊きして行った草木染め体験、自分達で織った布で小物制作体験や作品展開催、「親子で楽しめると」ご好評を頂きました。今後も技術の伝承・後継者育成を継続し

て行える環境を整え、より多くの方へ伝統工芸に触れ合える場づくりが課題です。

また今年度は町内の小学校と連携し、「昔の道具」を持参し、出前授業を行いました。行燈や釜など衣食住に関わる道具を揃え時系列ごとに展示し、見比べてもらいました。また、ろうそく・ランプ・蛍光灯の明るさを体験し、現在の文明化された生活のありがたさや昔の生活のよさを学んでもらいました。

今後も学校や地域と連携し、子供たちや地域の人々にも親しみのもてる企画や講座を計画し、より身近な郷土資料館とすべく、努力をしていきたいと考えています。

おかげさまで入館者 300 万人達成

奥多摩水と緑のふれあい館 堀口 行雄

奥多摩水と緑のふれあい館は、旧奥多摩郷土資料館をリニューアルし、本年で12年目を迎えました。新装開館以後も大勢のお客様をお迎えし、平成22年8月9日には入館者が300万人を達成記念セレモニーを実施しました。300万人の来館者となられた方には記念品を贈呈しました。今後も多くのお客様にご来館いただけますよう気持ちを新たにすることを心がけています。

観光地の中心ということや、周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の変化が目当たり楽しめる場所でもあることから毎年多くの方にご来館いただいておりますが、近年の社会情勢の変化等から入館者数は減少傾向にあります。東京都水道局、JR 東日本、町観光協会等、様々な団体との共催事業あるいは後援をすることにより入館者の確保に力を注いで参りました。

また、昨年からはこの一環として、奥多摩湖周辺の四季の自然や風物を紹介する写真コーナーを設け、来館された方が別の季節にも訪れてみたくなるような展示を心がけました。

今後も自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう管理運営を心がけていきたいと考えております。

平成22年度の主な活動として、次のようなイベントを実施しました。

- ・ 4月・春のミニコンサート（2日間延べ4回公演）
内容：ソプラノ歌手の共演
- ・ 6月・水道週間（7日間）花鉢配布
（都水道局と共同）
- ・ 7月・スタンプラリー（～10月）
- ・ 9月・ヘブンアーティスト公演
（午前午後の2回公演）
内容：パントマイム等
- ・ 9月・水源地郷土芸能公演
内容：小河内の郷土芸能（獅子舞3団体及び鹿島踊りの上演）
- ・ 9月～12月・奥多摩湖周辺の四季・風物等の写真展示コーナー開設
- ・ 11月・秋のミニコンサート（2日間延べ4回公演）
内容：都民交響楽団の演奏
- ・ この他 春・秋にJR 東日本「駅からハイキング」に協力、当館をゴールに設定

※平成23年度以降についても春・秋のミニコンサートを主に郷土芸能の公演等を予定しています。



300万人セレモニー



水源地郷土芸能公演

平成 22 年度活動報告～今後に向けて～

武蔵村山市立歴史民俗資料館 渡辺 絵美

●新公式ホームページの公開にあたって

現代の情報化社会において、もはや欠かせないインターネットは、主に情報を最先端に入手できる手段として一般に広く扱われています。

最近では、高齢者や障害者などを含む方々に、できるだけ簡単にインターネットでの閲覧操作ができるように配慮したアクセシビリティの導入化の動きが、都内各市町等のホームページで多く見られます。

当資料館では、平成 16 年 3 月から平成 22 年 3 月まで、独自のホームページを開設し更新を続けてきましたが、翌月 4 月より、アクセシビリティに配慮した市公式ホームページの公開に伴い、資料館でも、同じく新しく導入された市公式ホームページの中の一つとして位置付けられることとなりました。

ホームページを新しく公開するにあたり、内容の簡略化・統一化によって見やすさ・使いやすさなどを最優先に置くことで、高齢者や障害者を含む方々を対象に誰でも容易に閲覧操作のできるページであることのメリットは大きいと思います。しかしながら、デザインやレイアウトが自動的に統一されることで、その応用が利かなくなることや、各ページにおいて構成パターンの固定化により全体構成によるインパクトの印象は薄く、それまで独自の持っていた特色のあるページでなくなることなどのデメリットも挙げられます。

アクセシビリティの活用によって新しく公開した資料館のページの中で、今後の事業の掲載にどのような工夫をして閲覧者の目を向けさせるかが、今後の大きな課題となっています。

●平成 22 年度事業報告～軽便鉄道を通して～

武蔵村山市立歴史民俗資料館では、今年度、2010 東京文化財ウィーク参加事業に伴い、軽便鉄道をテーマにして 10 月 9 日から 11 月 30 日まで、特別展「武蔵村山の軽便鉄道」を開催しました。

軽便鉄道に関する展示を行ったのは、平成 6 年度特別展「村山を通った軽便鉄道」以来のこととなりますが、これまでに市民の方をはじめ、地域の鉄道史研究をされている方、並びに多くの鉄道ファンの方々より期待のご要望も多く、軽便鉄道に関する注目度が高まっていることから、今年度に念願の特別展を開催することができました。

今回の展示は、村山・山口貯水池建設の概要や変遷、市内に残る軽便鉄道の跡地、貯水池工事中に活躍した機関車・トロッコなどの紹介を通して、市民及び関係者の方々からご寄贈・ご提供いただいた約 80 点の写真を中心に展示し、貯水池工事写真のアルバムや車輪・レール・



特別展「武蔵村山の軽便鉄道」の展示風景

枕木などの実物展示も行いました。

軽便鉄道の展示を楽しみに来られた方は非常に多く、10 月 10 日より販売を開始した平成 22 年度特別展解説書「武蔵村山の軽便鉄道」は、前例になく販売当日から人気がありました。

また、関連事業として 10 月 23 日に文化財見学会「軽便鉄道跡地を歩く」、11 月 28 日には歴史講座「村山・山口貯水池と軽便鉄道」を行い、多くの方々にご参加いただきました。歴史講座では事業終了後、参加者にアンケートのご協力をいただいております。結果、この講座を通して軽便鉄道に関して興味を持たれた参加者もあり、概ね好評を得られました。

今年度に鉄道関連をテーマに展示事業を行ったところは当資料館だけでなく、近隣の博物館施設・博物館類似施設においても催しがあり、遠方の方から各施設の展示を見に回って来られる来館者も見受けられました。

当市は、鉄道はなく駅もない市として知られていますが、今回の展示を通して、かつては鉄道が走っていたという視点に少し変えてみると、全く鉄道がなかったわけではない、という方向に見方が変わる良いきっかけの場になったのではないかと思います。

今回の展示を踏まえて、今後の事業においても市民やその他多くの方々に当市の歴史の魅力を伝えることのできる場として PR を努めていきたいと考えています。

●その他の主な展示事業

*市制施行 40 周年記念企画展「写真で見る武蔵村山市の移り変り」平成 22 年 5 月 22 日～6 月 20 日、平成 23 年 2 月 14 日～2 月 25 日（後半は市役所ホール）

*夏休み子ども企画展「土の中のふしぎ～石・砂・土のなりたち～」平成 22 年 7 月 24 日～8 月 31 日

あきる野市五日市郷土館設立 30 年を迎えて～最近の活動報告～

あきる野市五日市郷土館 高畑 民男

〔五日市郷土館の概要〕

当館は、地域の歴史・民俗・自然などの資料を収集、調査研究し、それらを展示して市民に活用してもらう施設として昭和 56 年 11 月 5 日に開館しました。平成 7 年 9 月に秋川市と五日市町との合併により、あきる野市五日市郷土館となり、平成 23 年で設立 30 年になります。

〔常設展示〕

常設展示室では、歴史資料や市民から寄贈・寄託された郷土の生活用具などを展示しており、まちの移り変わりや往時の暮らし等を紹介しています。

1 階の展示室入口には、第 1 回ナイチンゲール記章に輝いた郷土の人・萩原タケが来館者の皆様を出迎え、「まちの移り変わり」などご案内します。

「里のくらし」「川のくらし」「山のくらし」のコーナーには、それぞれの地域で使用されていた様々な民具などの民俗資料を展示しています。「生物」や「地質」のコーナーでは、川魚や野鳥など郷土の生き物をジオラマで紹介し、また五日市地域は化石の宝庫でもあり、当館周辺にはこうした様々な野外学習の場が数多くあることを紹介しています。

2 階の特別展示室では古代から近代までの資料を展示しています。明治時代の展示では昭和 43 年に深沢家土蔵から発見された五日市憲法草案関係の文書などを展示しています。深沢家の当主であった深沢権八は、宮城県出身の千葉卓三郎を援助し、千葉らと共に明治 14 年に、民主的で人権尊重の精神にあふれた五日市憲法草案の起草に関わった一人です。また、江戸時代の末期からこの地域に普及した泥染めの黒い絹織物、黒八丈は別名「五日市」と呼ばれ、五日市の名を全国に広めました。その黒八丈とその製作用具などを展示しています。

〔企画展〕

平成 22 年度の企画展は、1 階の展示室に、ミニ企画展としてシリーズで開催している「郷土の古文書」コーナーに、江戸時代の「離別状」や「盗難届」などを展示公開し、その内容をわかりやすく紹介しました。2 階の企画展示室では、市内の見所を選定した「あきる野百景」とともに、当館周辺の文化財や自然などを紹介しました。また、五日市鉄道開業 85 周年にあたり、五日市鉄道の開業からの五日市線の移り変わりの様子を写真でたどる企画展を開催し、JR 東日本八王子支社が今年 11 月に行った「駅からハイク」とも協力して鉄道ファンなど 580 名もの方々に来館いただきました。更には、収蔵品展として、一般の家屋建築とは異なる独特の装飾が施されていた高明神社旧本殿の彫刻や神社関係の古文書や諸品を展

示し、地元の神社関係者を始め、多くの人の来館をいただいております。

〔旧市倉家住宅の概要〕

当郷土館の敷地内には、旧市倉家住宅があります。江戸末期の構造・形式を残しており、当時の生活様式を伝える建造物として、平成 10 年に市有形文化財に指定されました。平成 11 年 4 月にあきる野市に寄贈され、平成 12 年に当館敷地に移築しました。柱や梁などの主要な木材は腐朽した部分を継ぎ木して再使用するなど、使えない部材以外は旧材を使って復原し、公開しています。

〔事業の内容〕

旧市倉家住宅では、年間を通してひな祭りやこいのぼり、十五夜など、歳時の事業を実施したり、その他往時の生活用具や行事などを再現したり、道具を実際に使ってもらうなどの体験型の展示も行っています。

7 月及び 8 月には、ハンカチや T シャツなどを染める「藍の生葉染め体験教室」を実施し、多くの親子の参加を得て素敵な作品を仕上げてくださいました。11 月には「親子による稲の脱穀・粃摺り体験教室」を行い、足ふみ脱穀機や唐箕（とうみ）、一升瓶による精米などの体験をしていただきました。また 12 月末には親子での餅つきを実施しました。3 月には機織りの体験教室を実施しています。

旧市倉家住宅前の畑では、毎年、市民のご協力をいただいて「のらぼう菜」を植えて栽培し、来館者に郷土の味として試食していただいております。ほんのりと甘い味には大変人気があります。毎年 8 月の下旬に五日市地域活性化事業の一環として地域が「ヨルイチ」事業を行っておりますが、当館でも関連事業を実施して地域活性化事業の支援も行っています。



藍の生葉染め体験教室

また、平成22年度は市内中学校での職場体験実習の場として活用いただくなど学校とも協力し、また、毎週土曜、日曜には、市民解説員による旧市倉家住宅などの歴史などについての説明を行っていただいております。

【今後の事業運営】

当郷土館と旧市倉家住宅は一体となって、市民や市民

解説員、地域のご協力をいただき、親しみやすい施設作りに努めるとともに、往時の生活などを再現した体験教室に参加していただくことにより、相互にふれあう機会や交流の場を提供するなど、市民や地域の人達などと共に、地域の特色を生かした様々な事業を展開して行きたいと考えています。

来館者は満足しているか～プロダクトアウト的発想からマーケットイン的企画への転換の実例～

羽村市郷土博物館 河村 康博

博物館などで、内容があまりにも濃くてよくわからなかったり（自分が不勉強のためでも）、解説パネルがびっしりと並び、その文字量に圧倒されつつ、これって立体的な本なのか？というような展示に出会ったとき、「来館者をおいてけぼりにしていないか？」と感ずることがあります。

わが身を振り返れば、当館でもこれまで、結構この手の展示が多くありました。担当者が優秀でまじめ、熱意があればあるほどこの傾向が強くなってしまふようです。ミーティングや企画のプロセスを省みると、私はその背景に、「私たちが重要だと思う」ことを、「私たちが良いと思う方法で展示」する、という考え方、つまり館や学芸員が主体の発想が潜在しているのではないかと思います。

このことを踏まえ、当館では、昨年度から企画のたて方を見直しました。本稿では、そこへ到る考え方と取り組みについて触れたいと思います。

ある年齢以上の方は、かつて「電動缶切り」なる機械があったことをご記憶ではないでしょうか。缶をセットするだけで、モーターの力できれいに蓋が空けられるというアレです。発売当時は画期的なものとして話題になりましたが、今はほとんど見かけません。なぜでしょう。

私たちが欲しいのは、缶切りという「道具」ではなくて缶詰の「中身」です。ですから、缶切りを進化させるという発想は、より購買者の要求に近いプルトップ式というアイデアに淘汰されてしまったわけです。電動缶切りは技術開発的なプロダクトアウトの発想、プルトップ式は買い手側の満足度に立ったマーケットインの発想です。

企画展会場で来館者の様子を見てみると、難しい展示や情報過多の展示は、この電動缶切りの発想になっていることに気がきます。当館では、一般の来館者の多くが、隣接する草花丘陵の散策や多摩川での川遊びなどレクリエーションを兼ねています。こうした来館者は、解説文のパネルよりも、まず、展示資料から見はじめます。最初の資料がよくわからないもの、例えば単なる古びた木片だったりすると、とりあえずその直近の解説パネルに目を走らせます。ところがそのパネルにびっしりと字が

並んでいたりすると、これをスルーして次の資料へ、これもよくわからないとさらに次へ、という具合にだんだん歩く早さが加速し、途中からは「もういいや」という感じで、あっという間に展示室から出て行ってしまいます。

来館者は、文字や画像という情報伝達の「道具」があまりにも大量であったり、難しかったりすると、結局はその「道具」を使いません。使わない「道具」は邪魔なだけ、開けられない缶詰はストレスの対象になってしまいます。

来館者の満足度（＝展示の理解度）を上げるためには、すばやく缶を開けて缶詰の中身、つまりその展示の価値を味わっていただくことが大切です。したがって来館者はどのような人なのか、あるいは、どのような人に来館して欲しいのか、まずここから始めないことには、道具立ての決めようがありません。

そこで、当館では各事業の企画において、主な対象者を明確化した上で、内容・表現を考えていくことにしました。例えば、文字と写真を中心にした養豚に関する展示企画については、予定時期が夏期であったことから、主な対象者を①小中学生②若年ファミリー層に明確化し、これによって当初予定していた内容を大きく練り直しています。

養豚という産業は、今の子どもたちにとって身近なものではありません。しかし、「ブタ」自体は誰もが知っていますから、これを前面に出した方が訴求しやすいと考えられます。そこで、担当者は「羽村の養豚」というタイトルを、「企画展『みるブタ・かうブタ・たべるブタ』」に変更しました。子どもたちにも受け入れやすく、人と家畜の関係を端的に表すものになっていると思います。

同様に、内容も羽村の養豚に関する解説だけでなく、ブタという生き物のこと、人とのかかわりの歴史、「食べるため」という飼育の目的、そして食べ方など、来館者に身近な内容としつつ畜産の本質も加え文字と写真が主体の展示から、骨格標本や全身解剖模型（肉の部位の名称がわかる）といった実物資料もある展示へ、さらに目玉イベントとして市立動物園の協力を得て、中庭に本物のミニブタを展示して実際に触れ合う機会を設けるなど、

立体的な構成へと発展させています。また、PRの方法も、より対象者に直に訴えかける方法に変更しました。

こうした、企画方法を導入した結果、アンケートから、来館者には概ね満足いただいたことがわかりました。また、単純に比較はできませんが、この企画展では、入館者が前年の同期に比べて470人の増、続く秋季の企画展でも同じく358人の増になりました。来館者数の増加が展示の直接の目的ではありませんが、来館者、特にリピーターの確保は、博物館にとって必須事項です。

いまだ途中経過ではありますが、来館者のことをよく

考えようとするところから出発し、少しずつスタッフの意識が変わってきています。最近では、担当した企画展について、積極的に会場に出て展示説明をする学芸員の姿を見かけるようになり、来館者と館の間が縮まってきていることを感じます。

今後は、さらに顧客満足度の考え方に基づくアンケートの実施など、効果の測定についても明確化し、これを踏まえてマーケットイン的企画を向上させたいと考えています。

平成22年度主要事業報告

清瀬市郷土博物館 柳澤 剛

平成22年度に実施した主要企画展の報告と、新たに設置した展示室の紹介をします。

企画展「井上員男版画平家物語」

平成22年6月5日(土)から20日(日)までの14日間、企画展「井上員男版画平家物語」を開催しました。

この企画展では、平成21年に清瀬市在住の画商の方から清瀬市に寄贈いただいた井上員男作「版画平家物語」屏風を紹介しました。展示した「版画平家物語」屏風は六曲12作からなり、平家の栄枯盛衰が描かれています。これらの作品は、井上氏が開発した紙凹版濃淡表現という技法を使用して制作されております。

会期中には1,300人を超す方々にご鑑賞いただきました。井上員男氏の細かい描写の版画に、じっくり見入る人が多かったことが印象的でした。

また、井上氏と作品寄贈者の菅原氏との対談を会期中に行い、作品制作の裏話などを伺いました。当日会場は100人を超す方々で賑わいました。

コミュニティプラザひまわりに「郷土資料展示室」を開設

清瀬市では、旧東京都立清瀬東高等学校施設をコミュニティプラザひまわりという名称で、生涯学習、スポーツ、福祉活動等市民活動の拠点施設として平成22年7月3日(土)にオープンさせました。その中に、施設オープ

ンと同時に「郷土資料展示室」を開設しました。

「郷土資料展示室」は民俗資料の展示室で、高等学校時代の2教室を使用した展示となっています。「昔のなりわい」をテーマにした展示室と、「昔の暮らし」をテーマにした展示室を設けました。前者は、清瀬で行われてきた農業を、関係する農具等の展示を通して紹介しており、後者は、日常の暮らしの中で使われた道具類を中心に展示し、昭和30年代くらいまでの人々の生活文化を紹介しています。

第26回清瀬美術家展

平成22年11月6日(土)から14日(日)までの8日間、第26回清瀬美術家展を開催しました。

この企画展は、開館以来毎年開催している展覧会で、清瀬美術家懇話会(清瀬市内在住・在勤の画家・版画家・彫刻家で構成する美術者集団)との共催で行いました。今回は、絵画21作品、彫刻9作品を一堂に展示し、平面と立体の織りなす世界を紹介しました。会期中600人を超す方々にご鑑賞いただきました。

企画展「清瀬市制施行40周年記念写真展 柳瀬川回廊」

平成22年11月27日(土)から12月12日(日)までの14日間、企画展「清瀬市制施行40周年記念写真展 柳瀬川回廊」を開催しました。

この企画展は、昭和45年10月1日に誕生した清瀬市



企画展「井上員男版画 平家物語」



企画展「清瀬市制施行40周年記念写真展
『柳瀬川回廊』」

が平成22年をもって市制施行40周年となることを記念した事業の一環として行ったものです。柳瀬川とは、清瀬市の北西辺を埼玉県所沢市との境として流れる一級河川で、清瀬市ではその流れに沿って身近な自然を感じながら巡る回廊として整備したものです。

季節の移り変わりとともに装いを変える柳瀬川回廊の姿を、写真作品を通して紹介しました。会期中、1,100人を超す方々にご鑑賞いただきました。春夏秋冬、四季折々の柳瀬川回廊により一層の親しみを持っていただく契機になったことと思います。

企画展「清瀬周辺の昆虫たち—横山昆虫標本コレクション—」

平成23年3月26日(土)から4月10日(日)までの14日間、企画展「清瀬周辺の昆虫たち—横山昆虫標本コレクション—」を開催しました。

清瀬市内に在住の昆虫標本コレクター横山繁雄氏の昆虫標本を紹介した展覧会でした。

また、会期中に横山氏と対談形式の講演会を実施し、昆虫標本コレクションに対する“想い”などをお話しいただきました。

企画展「甲武鉄道と立川」の開催

立川市歴史民俗資料館 高橋 学

平成22年度、当館では秋季企画展「甲武鉄道と立川」を10月16日(土)～12月12日(日)のおよそ2ヶ月にわたって開催した。今年度は立川市制施行70周年にあたることから、立川の発展の礎を築いたとされる甲武鉄道にスポットをあて、立川と鉄道のかかわりを紹介した。立川市所蔵の資料だけでは展示構成することが難しかったため、当館としては初めて他館に資料を借用して行う本格的な企画展示となった。資料の借用や出張しての写真撮影など、初めて行う作業であり、慣れないこともあり試行錯誤しながら展示準備を進めた。

展示は、I玉川上水通船から甲武鉄道へ、II甲武鉄道の開通、III甲武鉄道と立川の発展、IV市街線開通そして国有化へという構成にした。Iでは玉川上水通船から甲武馬車鉄道、甲武鉄道へという流れを、文章と東京都公文書館所蔵の資料及び羽村市郷土博物館より借用した指田家文書を用いて展示し、甲武鉄道は中央(東京)の資本家がつくった鉄道ではあるが、多摩地区の有力者もその開業に関わっていることを示した。IIでは当館に寄託され

ている鈴木家文書を用いて、立川駅が北側に開設された経緯を示すと共に、今に残る甲武鉄道の遺構を紹介した。IIIでは立川駅前の発展の様子を鈴木家文書の立川同盟社(立川駅前に開業した運送会社)関係資料を中心として示すと共に、明治から終戦直後まで多摩川の河川敷に敷設されていた砂利専用線を扱った。IVではその後の甲武鉄道の国有化までの歴史を簡単に纏めると共に、立川周辺の発展のようすを明治から平成にかけての6枚の地形図によって示した。

関連イベントとして12月4日に「立川の近代化遺産を巡る」を開催し、立川周辺の甲武鉄道の遺構の見学会を実施した。

たまたまではあったが、隣接する国立市・武蔵村山市の資料館においても、鉄道関係の展示を同時期に開催していた。予算処置の必要があることはできないが、共同でクイズラリーやスタンプラリー等の企画を実行すれば来館者数増などの相乗効果も期待できたであろう。このような他館との連携等は今後の課題といえるであろう。

檜原郷土資料館の概要と最近の活動報告

檜原村郷土資料館長 吉沢 文夫

- ◆所在地 西多摩郡檜原村3221 TEL042-598-0880
- ◆休館日 火曜日(当日が祝祭日の場合は翌日)
- ◆入館無料
- ◆開館時間 4月～11月 午前9時30分から午後5時まで
12月～3月 午前10時から午後4時まで
- 檜原村郷土資料館は圏央道の開通により都心から約1時間30分と近くなったため、ドライブがてら来館するお客様が多くなりました。

当館では「自然と観光」「歴史と民俗」の2つをテーマに自然の景観や動植物及び遺跡発掘時の出土品並びに民具や兜式入母屋造りと呼ばれる古民家の模型などが常設されております。又、村の祭りを紹介するレーザーディスクやハイビジョン映像による「檜原村歳時

記」の放映が常時可能となっております。

尚、23年度の事業予定は下記のように計画いたしましたので、多数の来館をお待ちいたしております。

「平成22年度残事業予定」23年1月以降

1. マユ玉飾り
平成23年1月8日(土)～1月20日(木)まで
2. 檜原村野鳥写真展
平成23年2月10日(木)～3月9日(水)まで
「平成23年度事業予定」
1. 歴史探究会(社会教育事業の応援)
平成23年6月12日(日)(予定)
2. 資料館の燻蒸(臨時休館)

- 平成23年6月13日(月)～6月18日(土)まで
3. 特別企画「夏休み昆虫標本展」
平成23年7月16日(土)～8月31日(水)まで
 4. 特別企画「山野草標本展」
平成23年10月1日(土)～10月31日(月)まで
 5. まゆ玉飾り
平成24年1月12日(木)～1月23日(月)まで
 6. 檜原村野鳥写真展
平成24年2月9日(木)～3月8日(木)まで

「最近の活動報告」

檜原村には「松姫伝説」があり、甲斐の武田家が滅亡の折、武田信玄の5女「松姫」は実の兄「盛信」の命により山梨から八王子に落ち延びたが、その逃走経路は不

明で幾つかの伝説となっているが、その1つが「逃走経路に檜原村を使った。」と言うものである。

その証拠となるものが「松姫の手鏡」であり「逃走中に檜原村のある民家に一時の休息を求め、その謝礼として手鏡と刀を置いていった。」というものであるが、当館では民家よりその手鏡を借り受け現在展示中です。

又、当館では「檜原村文化財専門委員会」の事務局も兼務しており、近年路傍の石仏(馬頭観音・庚申塔、廿三夜塔等)

の盗難・破損等が多く聞かれるようになったため、村内に約580あると言われていた石仏の実態調査に3年前より着手し、現在約400を発見しており残すところ180となったので、23年度中には完了させたいと考えている。

郷土資料館としての歩みを踏まえ、新たな段階へ

日野市郷土資料館 中山 弘樹

こうしてパソコンに向かう部屋の窓から、どんど焼きのやぐらが目に入るのも、この資料館ならではの。

日野市神明の「ふるさと博物館」から、日野市程久保の現在地へ「郷土資料館」として移転した年度から取り組み始めたこのどんど焼きも、今年で6回目。わが資料館にかかせない年中行事のひとつとなり、我々のミッションの主要な一面を象徴している。

郷土資料館として再スタートを切って以来、それまでになかった様々な活動を展開してきた。しかし、その一方で従来からの取り組みも引き続き行ってきたために、すべてに全力投球というわけにもいかず、ある部分では多少手を抜きつつ何とか投げ続けてきたというのが実感である。この間、蓄積されてきた課題や矛盾も多く、郷土資料館としてのこれまでの活動の総括を行い、さらに高く飛翔する第2ステージに入って行く時期を迎えたのではないかと一学芸員として考えている。

もちろん、新たな段階に入っても、これまで取り組んできたどんど焼きに象徴されるような、地域とのつながり、新たな「絆」作りの結節点としての役割、地域文化継承の一拠点たらしめる指向性等々は地域博物館の自明の生命線として堅持されることは言をまたない。また、この三博協に集う各館やそこで日夜奮闘している職員各位との様々な交流なくして、わが資料館の今日もなけれ

ば明日もないのも、今更記すまでもない。

というようなことをパソコンに打ち込んでいたら、目が覚めた。2011年の初夢だったようだ。



どんど焼きの風景

企画展「浴恩館をめぐる人々」

小金井市文化財センター 多田 哲

昭和5年、(財)日本青年館は都心に程近く、かつ広大な武蔵野の面影を色濃く残す小金井の地に、昭和天皇即位大嘗祭で使用した神職の詰所を移築し、浴恩館と名づけました。翌昭和6年から宿泊研修所として全国青年団

の指導者層を集め、起居を共にしてリーダーシップを担える人材の育成に努めました。戦前の激動の時代である昭和8年から12年の間、下村湖人が所長として赴任し、職務の合間に名作『次郎物語』の構想を練った故地とし

て名高く、高齢化は進んでいるものの、熱心な愛読者が訪れ、湖人の目指した人間教育の理想に想いを馳せています。戦後、昭和48年、日本青年館は財政難を理由に浴恩館を小金井市に売却、さらに平成5年には室内を抜本的に改装、市内の考古資料・古文書・民具を展示収蔵する文化財センターとして生まれ変わりました。

このように複雑な経緯を経ているためか、未だに近隣でも当館を浴恩館と呼ぶ人も多く、その名は広く浸透しています。しかしながら青年団講習所とは何なのか、正確に知悉する人は近年、ますます減少する傾向にあります。このような時代の趨勢を踏まえ、当館でも平成15年に企画展「青年団と浴恩館」を開催し、その広範な活動を周知すべく努めました。すでに7年が経過し、ますます忘却の彼方に沈みつつあります。そこで、今回改めて浴恩館に集った歴史的人物を中心に、「浴恩館をめぐる人々」と題して、企画展を11月2日から12月26日まで開催しました。

今回の展示では下村湖人だけでなく、日本青年館の生みの親であり、「青年の父」と謳われた田澤義鋪たざわ よしはるや湖人の助手の五百歳辛碌いおおい しんろく、湖人の一番弟子である大河平聖雄、日本青年館初代理事長近衛文麿のブレイン団体である昭和研究会の面々、浴恩館の主ともいべき皆木繁宏みなぎ しげひろなど、未だにスポットを当てられていない人々の業績を掘り出すべく努力しました。

こうした各人物の解説だけでなく、余り知られていない『次郎物語』第五部の解説展示も新たに付け加えました。一般に『次郎物語』は湖人自身の佐賀での幼少期をモデルにした第一部が有名で、浴恩館を舞台に、はたちの頃の次郎を描いた第五部は知られていません。第五部は第一部と並んでノンフィクション性が強い、とは湖人直弟子の永杉喜輔ながすぎ きすけの言ですが、小説中では人名・固有名詞が変更され、浴恩館で起こった出来事がそのまま描写されているとは、第五部だけを読んでも思い至りません。そこで補説注釈を加えるかたちで、モデルとなった人物・舞台と小説中の名称との比

較対照を試みました。残念ながらこの点については、まだまだ私自身、未消化な事柄が多く、特に昭和研究会メンバーとの関わりなど、更なる研究の余地があります。

この企画展と連動して11月13日には三瓶千香子氏を講師に招き、「青年の父田澤義鋪の思想を今に活かす」と題して講演会を行ないました。現代の閉塞した時代状況は、青年団の力が必要とされた戦前の日本とある意味近く、地域の人と人のつながりの再生が待望される現代にとって、青年団の果たした役割を顧みるところ大であり、浴恩館公園美化サポーターをはじめとする受講者の方々が聴き入っていました。

最後になりましたが、問題点をひとつ。今回の企画展は湖人のファンや地域活動に携わる人々には高い関心を呼びましたが、一般市民にアピールしたとは到底いえません。青年団という、どこか古臭いイメージが付きまとい、企画展が目当てでない来館者には興味を持ってもらえないのが実情です。この状況を変えるには、根気強く浴恩館や青年団について展示や講座を続けていく他ないのではないかと、暗中模索しています。



浴恩館をめぐる人々

企画展「昆虫細密画に見るミクロの世界」～中西章の原画から～

くにたち郷土文化館 齊藤 有里加

くにたち郷土文化館では、22年度夏に昆虫細密画をテーマにした企画展「昆虫細密画にみるミクロの世界～中西章の原画から～」を行いました。昆虫細密画は、昆虫を科学的にとらえて正確に描きます。昆虫の形態や生態をよく観察し、絵という手段で表現したものです。70～80年代の子ども向けの科学絵本・図鑑は手描きの細密画が多く使われていました。本展示では、これらの時代を

中心に活躍されたサイエンスイラストレーター中西章氏の昆虫細密画及び制作道具、標本、研究道具など約200点を展示しました。

今回の展示で伝えたかったことは「これらの細密画は一体どのようにして出来上がるのか？」という点です。昆虫を描く上で大切な事は、何よりもまず、「昆虫が大好き」なこと「よく観察し、触れ合う事」です。数多くの

昆虫標本や、採集道具からは中西氏がどれだけ自然と触れ合ってきたかを感じることができました。また、昆虫をよりリアルに表現するために、紙や画材も様々に工夫が凝らされていました。技法も鉛筆、水彩、エッチングなどがあり、様々なスタイルを展示することができました。さらに、毎週土曜日に実施された細密画実演では、1時間余りの中で、チョウやバッタなどのイラストを描いていただきました。特に中西氏はパソコン技術を用いず、すべて手描きで制作を行います。サイズを計測し、描いていく。流れるような作業の中で、種の特徴をとらえていく様子を実際に見ることができました。

来館者層は子どもから大人まで幅広く、期間中 1,257 人の来館がありました（期間：7月23日～9月7日）。企画側は昆虫や自然観察に興味のある方や、夏休みの子ども連れを想定し、実際にそのような方が多く来館しましたが、特徴的だったのは美大生の来館です。実演の様子を熱心にメモに取る様子が何度も見られました。サイエンスイラストレーターは、日本ではなかなか後継者が育たない現状にあります。研究者と同等の知識・観察力と高い技術力が求められ、制作期間もかかり、資料収集から大変な労力を求められるものです。原画を目にし、誰もがその細密さ、正確さに驚きますが、1点1点地道に積み重ねていく分野です。プロとしての技術と経験・知識を持ち合わせた方の技術が見られ、対話ができる今回の実演は、芸術を志す人にとっても貴重な機会であったようです。

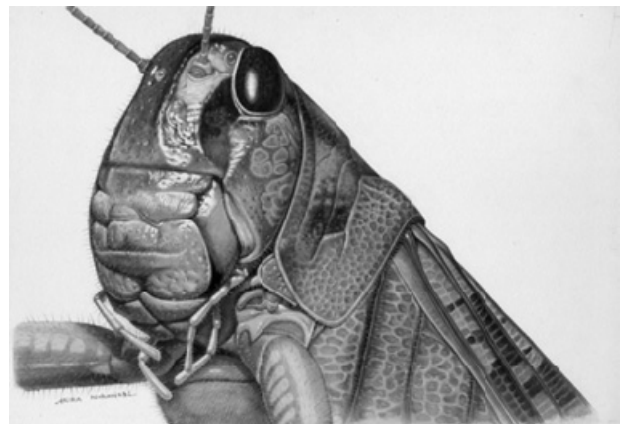
会期中、中西氏と子どもたちの対話の機会を各所で見かけました。「どうしたらこんなすごい絵がかけられるようになるの?」「細密画として、本格的に描きだしたのは15歳くらいから。全体の形がとれるようになるのは、大きくなればできるようになってくるから、それまではとにかく昆虫の形や行動をよく観察して。好きな絵を見ながら描いてみるのもうまくなる一歩だよ。」昆虫が好き、絵を描くことも大好きという共通点で、世代を超えて話している様子はとてもほほえましく、子どもたちの心に自然と触れ合う楽しさを与えられたと感じます。



サイエンスイラストレーター中西氏の仕事机再現



中西氏による細密画実演の様子



中西氏細密画 トノサマバッタ（頭部）

ネット社会と博物館事業の一考察

東大和市立郷土博物館 木村 敏

平成22年6月、小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還し大きな話題となりました。月以外の地球外物質を初めて持ち帰ったことで、マスメディアにも大きく取り上げられました。

そんな中当館では、はやぶさ帰還の3か月前から、はやぶさをテーマとするプラネタリウム番組の投影を開始しました。一部をカットしたダイジェスト版であったこの番組は、6月初旬に一旦投影を終了しましたが、はや

ぶさ帰還のタイミングに合わせ、急遽6月中旬にノーカット版の臨時投影を実施しました。

さらに9月には急遽はやぶさプロジェクトに関する講演会を開催したほか、9～12月の土日祝日の投影枠のひとつを、アンコール投影としてノーカット版のはやぶさ番組に差し替えました。

このように当館では、当初計画を変更しながら世間のはやぶさ騒動に対応しました。結果的に、はやぶさ人気

をそれなりに取り入れることに成功し、前年を大きく上回る観覧者数を記録しました。行政が運営する公共施設は「流行」に乗りきれないことも多いのですが、今回は上手くいったと自賛してもいいかもしれません。

ただ一步下がってこのはやぶさ騒動をながめると、これまでにない一面があったように感じられます。それはインターネットの存在です。

3月のダイジェスト版の投影が始まった頃、はやぶさを取り上げているマスメディアは皆無でしたので、一般の人の認知度は決して高くありませんでした。天文担当以外の博物館職員は「このテーマでお客さんは集まるのか？」と懐疑的でさえありました。実際3～6月の観覧者は平日は平均～平均以下、土日が平均～少しいい程度という状況でした。

しかし実はこの頃、天文ファンの間ではこの番組の話題が沸騰しつつありました。すでに投影していた他館での評判が、ネット上で口コミ情報として広がっていたのです。ノーカット版の投影館では満席が続き、見たくても見られない天文ファンが、投影館の情報をやはりネット上で交換しているという状況だったようです。当館にも「いつまでやっているのか？」「満員ではないか？」「確実に見るにはどうしたらいいか？」と切羽詰まった感じの問い合わせが相次ぎました。とはいうものの、当館での投影は満席となることは少なく落ち着いていました。

状況が大きく変わったのは、はやぶさ帰還の前後からです。この頃にはテレビでも取り上げられるようになったため、一般の関心が一気に高まり、その後の臨時投影や講演会、アンコール投影では、当館でもお客さんがあふれる状況が見られました。

おそらくネット上でも、天文ファンに加えマスコミ報道ではやぶさを知った一般の人が、このお祭り騒ぎに新たに参入したのだらうと思われまます。当館へも、ネットで仕入れた断片的な情報を基にしたと思われる問い合わせや苦情が増えまました。中にはネット情報を盲信するあまり、こちらが提供する情報に納得できずに怒り出す人さえいました。不可解な思い込みや妙な勘違いを正すの



天文講演会の様子

は、非常に骨の折れる作業でした。

今やインターネット上では、誰もが気軽に「ブログ」や「ホームページ」をつくり、携帯電話から手軽に情報発信をしています。しかしそうした普通の個人が発信した情報は、全く無責任なものが多く、ネット上には無責任かつ不確実な情報があふれているのです。しかしそのことを理解せずに、無責任な情報に踊らされてしまう人が、意外に多いようです。あまりの情報の多さに、人間の脳が追いつけないのでしょうか。

これからの時代、あふれる情報の中から、必要かつ確実なものを選び出す作業は、博物館事業の運営においても必要なことです。当館の天文担当者が、天文ファン目当てに企画したはやぶさ関連事業は、ネットや他館との情報交換に基づいて実施したものです。一般の盛り上がりは予想以上でしたが、いい後押しになりました。

また事業計画の変更を敢行できた当館の意外な柔軟性は、インターネットやその他の情報を的確に評価、判断できれば、今後の発展につながる可能性を感じるものでした。しかし判断を誤れば、全く逆の結果になることもありますので、その見極めは簡単ではないでしょう。

近年のインターネット環境の普及、充実ぶりは目を見張るものがあります。その中で、情報におぼれることなく、世の中の動きを見失わないように気をつける必要があります。

市民が調べる多摩の民俗

パルテノン多摩歴史ミュージアム 乾 賢太郎

パルテノン多摩には、「多摩くらしの調査団」という市民ボランティアがあり、2011年1月現在で18名が登録しています。ボランティアは、学生・定年を迎えた方・代々地域に暮らす方・新しく居住した方など幅広い層で構成され、多摩の歴史や民俗に興味を持って活動しています。

平成20年(2008)12月に発足した調査団の活動目的は、「多摩に伝わる民俗文化を調査・記録する」ことを第

一に掲げていますが、発足当初は当館学芸員による民俗学の解説や、外部講師による年中行事の講義から始まりました。基礎的な学びが終わると、次に行ったのが民俗調査についての解説です。民俗学は主に聞き書きを通して、地域に伝わる暮らしぶりを調査・研究する学問なので、調査方法についてもレクチャーを行いました。これらの室内での講義が終わると、いよいよ野外の調査です。初めての調査は、多摩市馬引沢のサイノカミ行事につい

てでした。この行事はオンベラボウと呼ばれる御幣がついた柱を疫病除けのために立て、サイノカミの小屋を作る小正月の行事であり、現在でも地域の多くの人々に支えられています。調査団は、この行事を中心に地域の民俗について調べ始めたのですが、当初は事前の下調べに一苦労していたようでした。しかし、聞き書き調査になると、調査団は地域の話者の方々とコミュニケーションをとりながら、和気あいあいと調査に臨み、地域の方々が語る生き生きとした暮らしぶりの様子に関心を払っていました。その後、調査と報告会を繰り返し行い、やっとの思いで原稿の執筆に至りました。報告書という体裁で文章を書くことが今までなく、戸惑う方もいましたが、聞き書きで得たデータやメンバー間での意見交換をもとに、一人ひとりが「地域の民俗文化の記録を残し、その成果を将来に伝えたい」という思いを込めて書きあげることができました。調査団の努力は、平成 22 年 (2010) 5 月に民俗調査報告書『多摩市馬引沢のサイノカミ行事』(税込 100 円) として実を結びましたので、ご興味のある方は手にとってご覧ください。なお、本報告書はパルテノン多摩歴史ミュージアム受付で販売しております。



そして、報告書刊行後、調査団は 2 期目に突入し活動を続けています。現在は、多摩市落合の山王下地区と下落合地区を中心に調査を進めており、成果は報告書として来年に発行する予定です。これからもボランティアの活動目的を念頭に入れつつ、地域の方々と触れ合いながら、調査を行っていこうと思います。

平成 22 年度 新規事業「紅葉とたてもののライトアップ」の実施について

江戸東京たてもの園 高橋 英久

江戸東京たてもの園では、平成 22 年度の新規事業として、11 月 26 日 (金) ~28 日 (日) の紅葉の時期に合わせて「紅葉とたてもののライトアップ」を開催しましたので、ご報告します。

趣旨について

夜間のライトアップは、昨今、庭園や公共施設、博物館などでも日中とは趣の異なる提示の手法として注目され、多くの施設が実施している状況です。当園では、木々の紅葉や建物に情感たっぷりにやさしい光を当て、別の姿を楽しんでいただくことを目的に平成 22 年度から新たに取り組みました。園内全域にわたり、自然の美や家の温もり、明と暗の対比により生じる建築物の奥行きなど、各所においてテーマを設定し多彩な見どころを持って実施しました。

実施について

実施にあたっては、監修を面出薫氏 (武蔵野美術大学教授) にお願しました。面出氏は住宅照明から建築照明、都市・環境照明の分野まで幅広い照明デザインのプロデューサー、プランナーとして活躍されている方です。

照明機材は、舞台照明会社に委託しました。元々の園の設立のコンセプトとして、夜間におけるライトアップを考慮してはいないので、機材の設置等には電源の確保から始まり、機材の置き方や向き、ケーブルの引き直し



子宝湯弦楽コンサートの様子

など、様々な工夫が必要となりました。

また関連事業として、復元建造物「子宝湯」内において、本企画に合わせしつとりと邦楽 (津軽三味線・尺八)、弦楽 (チェロ・バイオリン・ヴィオラ)、民族楽器 (巴拉ライカ・アコーディオン) のコンサートを行いました。

その他にも当園ボランティアにより民家の囲炉裏に火を入れたり、小金井市商工会の協力による 1,000 個のキャンドルの灯火も実施しました。

課題

本事業は、大幅な入園者増に結びつく結果とはなりませんでしたが、内容的には概ね好評でした。課題としては、ライトアップについて来園者の意識に差異があり、まばゆいほどの光を期待されていた方もいて、当園の趣旨を明確に告知する仕方に工夫が必要であったと感じました。また、足元が暗く危険だという指摘もいただき、急遽懐中電灯を配布するという対応をしました。

本事業により、新たな当園の楽しみ方を提示できたのではないかと考えています。次回以降も明と暗の絶妙なバランスを持って、よりよい事業としていきたいと考えています。



ライトアップの様子 (西ゾーン)

もっと身近に、縄文そして弥生

東京都埋蔵文化財センター 小葉 一夫

2010年度の展示テーマは「あっ、縄文だ」。

ここ5年間「多摩丘陵の縄文集落」「縄文人がやってきた」「縄文生活」「縄文人の暮らし」と縄文に特化したテーマを続けてきましたが、今年度の展示で、最も予算を割いたリアル縄文人を登場させたことで、ひとまずこの縄文シリーズもピリオドとなりそうです。

リアル縄文人は単なる復元展示としての活用だけではなく、縄文の象徴、モニュメントとしての展示効果を狙ったもので、実際、見学者の目に最初に飛び込んで、「あっ縄文だ」と声を上げてもらっているのが、ファーストインパクトとしての狙いは成功であったといえそうです。

そもそも縄文テーマの特化性は、ここ数年来の小学校見学の恒例化によるところが大きいといえます。毎年展示替えを行うのは3月中旬で、リニューアルオープンしてすぐの4月の新学期にちょうど6年生の団体見学が集中します。歴史の授業の始まりとして縄文時代がスタートとなるので、当センターでの見学ツアーで歴史授業の導入になります。ちなみに今年度の4・5月の2ヶ月間だけでおよそ80学校、7,000人の生徒が見学に訪れています。このため、展示テーマはおのずと学校見学の要望にあったものが目指されることとなりますが、幸い当セ

ンターの母体となる多摩ニュータウン遺跡群の有する豊富な縄文資料を全面的に活用することによって、学校教育と多摩の地域性を最も有効な形で活用することができました。

展示方法としては、形に復元した数多くの縄文土器を露出展示し、小学生を含めた見学者に実際に直接触ってもらい、そこから縄文を感じ取ってもらっています。壊れるリスクよりも見学者に肌で感じてもらう体験を重視した選択です。

また、体験コーナーの充実にも力を入れてきました。特に縄文時代に関連することとして、縄文原体の粘土板への施文、縄文土器パズル、石皿とすり石でのドングリ磨り潰し体験、舞切り式の火起こし体験、縄文服の試着コーナーなどなど、短時間で縄文体験できるものとしてはほぼ出尽くした感がありますが、やはり小学生の人気コーナーになっています。

ここまで来ると、学校の要望も縄文だけにとどまらず、次の弥生時代の展示を囑望してきます。しかし残念なことに多摩ニュータウン遺跡群内では弥生の遺跡が極端に少なく、これまでも弥生が展示のメインになることはなく、教科書的な縄文から弥生といった比較検討が可能な



いといった欠点がありました。多摩に弥生は乏しいということを示すことも一つの方策ではありますが、あまり多摩にだけこだわっているのは、本来の弥生の姿を伝えることができなくなってしまうくらいがあることから、あえて来年度の展示では、極めて試験的ではありますが、縄文と弥生の二時代を併記展示することとし、「2011 はるかな旅 縄文から弥生へ—赤き縄文、青き弥生—」としました。

近年の活動のもう一つの特徴は、今年度から実施した体験事業のオール無料化にあります。これまで年間を通して実施してきた、縄文土器づくり教室や、縄文アクセサリ作り教室などの無料化です。これまでは参加者に材料費程度の費用を負担していただいていたが、よ

り気軽に事業に参加していただくために無料化に踏み切りました。

また、今年で2年目に入った「火おこしマイスター」制度。これまでに数多くの人が火起こしに挑戦し、百人を超える人がマイスターの認定を受けました。これも日常的な体験への足がかりの一つですが、近い将来「いつでも勾玉」の実施も検討しています。

私たちのなすべきことは、入館者数をカウントすることではなく、いかに敷居を取り払うか、いかに見学者の視点に立てるか、いかに身近なものとして感じてもらえるか、そのためにはいかにしたら良いのか。そのことに対して日々努力を続けること、それ以外にはありません。

平成 22 年度活動報告

集合住宅歴史館 野原 亜沙子

集合住宅歴史館は、(独)UR都市機構 都市住宅技術研究所内にある施設の1つで、日本住宅公団時代に建設された団地の一部や、同潤会代官山アパートといった、歴史的に価値の高い集合住宅を移築・復元しています。

当研究所では「まちとすまい」に関する、先進的な調査研究や技術開発、試験を行っており、耐震性能から居住性能、省エネ、環境共生といった広い領域までをトータルに研究しています。敷地内には、実験・研究用と展示・体験用を合わせ、全部で16の施設がございます。展示・体験用の施設は、毎週火・水・木、及び第2、第4金曜日に一般公開をしており、事前予約制となっておりますが多くの方にご来場いただいております。

集合住宅歴史館は、公開施設の中で最も人気の高い施設であり、建築関係の企業や大学といった団体の方から、ご家族連れの方まで、幅広いお客様にご覧いただいております。また最近では海外のお客様も増え、ちゃぶ台で生活をしていた日本独特の畳の部屋を実体験していただいております。

毎年5月には「特別公開」というイベントを行っており、予約無しで自由に研究所内をご覧いただける日を設けております。今年度は「ルネッサンス×ふれあって暮らす」【団地再生とコミュニティの再生】というテーマで、5月21・22日に行いました。現在取り組んでいるIT機器による見守りシステムについての中間発表や、非常食を実際に食べてみたり高齢者体験をしたりという参加型のイベントも開催しており、たくさんの方々にご来場いただきました。もちろん集合住宅歴史館も開放しており、何度でもお好きなお部屋をご覧いただけるようになっております。



最近はこんな非常食も！



もうすぐ実験開始！！

平成 22 年度の取組み～参加・体験型科学館として～

多摩六都科学館 松本 南都生

今年度、多摩六都科学館では様々な企画展・プラネタリウム番組でお客様をお迎えしました。

春は「トリックアート展」です。トリックアートとは、目の錯覚を巧みに利用した新感覚の絵画のことで、来館者には不思議な感覚と驚きを楽しんでいただきました。お持ちの携帯やデジカメで、絵と一緒にポーズをとって写した「おもしろ写真コンテスト」も同時開催し、こちらも多くの方にご参加いただきました。

2010年が国際生物多様性年であったこともあり、夏の特別企画展は「ロクト大昆虫展」を開催しました。ここでは世界の昆虫標本約1,700点が大集合し、見たこともないような巨大カブトムシやクワガタを前に輝く子ども達の眼がとても印象的でした。また、館内に設置した「カブト・クワガタムシハウス」では、人気のアトラスオオカブトとクワガタが日替わりで登場し、昆虫たちと直接ふれあうことができました。

プラネタリウムドーム「サイエンスエッグ」では、夏の時期に宮沢賢治氏の不朽の名作「銀河鉄道の夜」を投影。番組ではまるで銀河鉄道に乗っているような幻想的な世界がドーム全体に広がり、投影が終わると感動のあまり涙を流す方もいるほどで、大変好評を博することができました。

秋には「第10回日本万華鏡大賞・多摩展」を開催しました。今回は応募作品のうち佳作以上の作品約30点のほか、過去の入賞作品約20点も展示され、より充実した内容となりました。万華鏡を手にとりて次々と繰り出される色彩豊かな世界を堪能するほか、自分でオリジナル万華鏡をつくるワークショップも大変人気でした。

このほかにも科学館では多くのイベント・展示を行ってまいりましたが、コンセプトとしているのはお客様自身が参加し、体験するということです。今後も楽しみながら科学を体験できる科学館として、より多くの方に科学に興味を持ってもらえるよう努力・邁進していきたいと思えます。



おもしろ写真コンテスト入賞作品



日本万華鏡大賞・多摩展の様子

国立ハンセン病資料館最近の活動～企画展を中心として～

国立ハンセン病資料館 田代 学

平成22年度は春季企画展として「着物からみる療養所の暮らし」（会期:4月24日—7月25日）、秋季企画展として『全生病院』を歩く—写された20世紀前半の療養所—（会期:9月25日—12月26日）を開催しました。春季企画展においては入所の際に渡される「うどん縞」の着物、裁縫・洗濯の道具、祭半纏や歌舞伎で使われた衣装、そしてそれらにまつわる「語り」を通じて、ハン

セン病療養所の中の「暮らし」を展示しました。また会期中に多磨全生園入所者を交えてギャラリートークを3回行いました。ハンセン病回復者と来館者が話し込む場面があるなど、ハンセン病回復者と来館者の交流の場ともなりました。

秋季企画展では1909年の全生病院（現多磨全生園）の開院当初から1940年代の半ばまでの園内の様子を写

した写真 70 点を展示しました。全生病院の中と外を見渡すことが出来た「築山」から撮られた写真をつなげて、昭和初年の「築山」の眺めを再現した巨大パノラマ写真も展示しました。全生病院時代の入所者が見た世界を体感でき、来館者は入所者の思いを想像したのではないかと思います。また写真が写された現場をめぐる園内フィールドワークとシンポジウムを行いました。フィールドワークでは多磨全生園入所者も参加し、それぞれの場にまつわる「記憶」が呼び起こされました。

今年は2月11日から3月6日まで企画展「高山勝介作陶展」を当館の1階ギャラリーにて開催しました。高山勝介氏は1926年に東京で生まれ、戦後ハンセン病を発症し1946年に多磨全生園に入園します。入園後は園内作業や教会活動に従事し生活を送っていましたが1979年頃ハンセン病の後遺症で視力が低下し失明しかけました。視力の低下で落ち込んでいた時、多磨全生園のリハビリテーションの一貫として設けられていた陶芸室に通う藤田四郎氏から「土をこねているだけでもいいから」と声をかけられ、作陶活動を始めます。それから30年以上、今に至るまで作陶活動を続けています。

作陶が眼の直接的な治療になったわけではないですが絶望を乗り越えるきっかけとなったこと、そして高山氏の生きがいになっていったことは確かです。ハンセン病の後遺症を抱える高山氏にとってモノを生み出す喜びを感じることができたのが作陶でした。

本展覧会では、ハンセン病を乗り越えた高山氏の姿を、作品とあゆみを知ることのできる写真とともに紹介しました。本展示会に向けて制作された新作も展示しました。作品そのものから感じる繊細さや温かさから高山氏の生きる姿を感じていただけたのではないかと思います。



「築山は観ていた」
 秋季企画展「『全生病院』を歩く」で展示した巨大パノラマ写真。



作陶する高山勝介 撮影：船元康子

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩 No.32

発行日 2011年3月25日
発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2010年度会長清瀬市郷土博物館
〒204-0013 東京都清瀬市上清戸 2-6-41
印刷 明誠企画株式会社
編集委員 奥多摩水と緑のふれあい館 堀口行雄
福生市郷土資料室 菱山栄三郎
瑞穂町郷土資料館 高田賢治
武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋健樹

☆ 東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車、徒歩8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」南口、徒歩15分／京王バス市民会館経由「西八王子駅」行、「市民会館前」下車すぐ JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス、「市民会館」下車すぐ
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から郷土の森総合体育館行バス、「郷土の森正門前」下車すぐ
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤の台団地行バス、「市立博物館前」下車徒歩7分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車、徒歩12分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車、徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車、徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行バス、「奥多摩湖」下車すぐ
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車、徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス(MMシャトル)市民体育館行、「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車、徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車、徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車すぐ
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車、徒歩10分／駅前バス乗場1番から西武バス、「郷土博物館入口」下車徒歩1分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行バス、「農業試験場前」下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行バス、「郷土資料館」下車すぐ
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行バス、「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑬、「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車、徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」からイオンモール行バス、「八幡神社」下車徒歩2分／多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り、「八幡神社」下車徒歩2分
バルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車、徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車、徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西部バス「小金井公園西口」または関東バス、「江戸東京たてもの園前」下車すぐ
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口下車、駅前すぐ
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車、徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王線相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車、徒歩5分
集合住宅歴史館（都市再生機構都市住宅技術研究所）	八王子市石川町2683-3	042-644-3751	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス、「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車、徒歩18分／西武新宿線「田無駅」北口からはなバス、「多摩六都科学館」下車すぐ
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行・所沢駅行バス、「ハンセン病資料館」下車すぐ／西武新宿線「久米川駅」北口から清瀬行バス、「ハンセン病資料館」下車すぐ
八王子市こども科学館	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」北口から西東京バス杏林大学・みついで台行等、「サイエンスドーム」下車徒歩2分
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢2-21-1	0422-34-3600	JR中央線「武蔵野駅」南口から小田急バス狛江駅行、「天文台前」下車すぐ／京王線「調布駅」北口から小田急バス武蔵境駅南口行、「天文台前」下車すぐ